

# 会報

第24号 (平成30年1月11日発行)

北海道高等学校世界史研究会

事務局 北海道苫小牧西高等学校

〒053-0807

苫小牧市青葉町1丁目1-1

TEL(0144)72-3003 / FAX(0144)74-2977

## 高世研第49回大会に向けて

北海道高等学校世界史研究会

会長 橋本達也

(北海道釧路湖陵高等学校長)

新年、明けましておめでとうございます。

会員そして全道の各高校で、世界史に限らず、地歴公民科教育に携わっているすべての先生方の益々のご活躍を祈念いたします。

昨年8月4日、札幌市教育文化会館において、「国際理解を進め、歴史的思考力を育成するための世界史教育」をテーマに第48回大会を開催することができました。講演の1本目は、東京外国語大学教授の小松久男先生による「イスラーム世界と日本 - イブラヒムの活動から考える」と題するもので、19世紀半ばにロシア領シベリアに生まれ、20世紀半ばに東京に没した、熱烈な汎イスラーム主義者にしてジャーナリストであったアブデュルレシト・イブラヒムの軌跡をたどりながら、日本の近現代史を新たな視点から見直そうとするものでした。

2本目は、東京大学名誉教授であり、高大連携歴史教育研究会会長でもある油井大三郎先生に第42回大会に引き続いてお越しいただき、「実施可能な『歴史総合』カリキュラム案の検討」と題して、今まさに進行中である新科目の創設に関して、その基本的な考え方・意義・カリキュラム作成の基本的観点と試案等について、具体的かつ広範な視点から解説していただきました。本研究会では、歴史教育の大きな変革のうねりを認識し、第40回大会以降、「歴史教育の抜本的改革」を大きなテーマに毎年の研究会を組織してきました。それは、現在の学習指導要領改訂の基底となっている学習観・学力観の根本からの変化を受けたものであり、アクティブ・ラーニングに象徴される新たな学びのあり方を求めたものでもありました。油井先生の歴史教育改革に対する強い熱意と、本研究会に対する励ましと期待に改めて感謝申し上げます。

本研究会が大切にしている研究討議では「世界史をグローバルにとらえ、歴史的思考力を育てる授業とは」をテーマに、約2時間にわたって活発な討議が続きました。討議の中で、本研究会副会長である日高教育局の赤間局長から、最近の高大接続改革・次期学習指導要領について、小中学校の新要領のポイントも踏まえた解説がありました。新要領の改訂の柱の1つに、児童・生徒に育成することを目指す資質・能力が小中高の縦のつながりと科目間の横のつながりの中で明確にされていることがありますが、そうしたことを噛み砕いて説明していただきました。また、札幌北陵高校の本間先生からは国立教育政策研究所における「歴史系授業の工夫・改善のための研究協議会」の報告が、札幌英藍高校の菊池先生からは、本研究会を代表して参加した「高大連携歴史教育研究会 第3回大会」の報告が行われました。新科目「歴史総合」の理念、歴史用語の精選を通じた歴史的思考力の育成を主眼とした教科書のモデルプランなど、大変興味深い話が繰り広げられました。

今年も8月に大会を実施します。特に、まだ参加経験のない方、世界史を自分の専門とは考えていない方、是非とも様子を見てみて下さい。そして、今後ともコミュニケーションを取り合って、「『世界史』の授業を通してできること・目指すべきこと」を互いに探っていきましょう！お待ちしております！

## 第48回研究大会記録

### 「国際理解を進め、歴史的思考を育成するための世界史教育」

日時	平成29年8月4日(金)
会場	札幌市教育文化会館 研究室403
講演	小松久男氏(東京外国語大学教授) 油井大三郎氏(東京大学名誉教授〔高大連携歴史教育研究会 会長〕)
司会	吉嶺茂樹氏(北海道有朋高等学校教諭)
記録	菊池真哉氏(北海道札幌英藍高等学校教諭) 北嶋靖之氏(北海道札幌西陵高等学校教諭)

## 講演

### 「イスラーム世界と日本 — イブラヒムの活動から考える」

東京外国語大学教授

小松久男

#### はじめに

皆さんおはようございます。いま「歴史総合」のことで関心が高まっていますが、私自身もかなり前から日本史と世界史を分けるということに関してはあまり意味がなく、むしろ一緒にした方がはるかに面白いのではないかと思っているのですが、日本史・世界史の区別なく現実の歴史は動いており、そういう一つの例として今日はイブラヒムという人物に光を当ててみたいと思います。

日本では、イスラーム世界というのは日本から遠く離れた世界であって、ほとんど歴史的に見ても関係がなかった、とよく言われているわけですが、実際には調べていくと実は相当さまざまなつながりが見えてくるということがわかります。今日はそういうことについて少し触れてみたいと思います。また未来のことも考えると、いま世界におけるイスラーム教徒の数はごく大雑把に言っても、世界人口の5人に1人で、その人口は今後とも増えていくであろうという存在感のある宗教であり、我々もイスラーム教をはじめとしてイスラーム世界についてよく知っておく必要があるかと思ひまして、このようなテーマを選ぶことにしました。

#### 1. アブデュルレシト・イブラヒムとは誰か

最初に、この人物の正式の名は「アブデュルレシト・イブラヒム」と言いますが—長いのでイブラヒムと略します—どのような人物かと言いますと、当時の帝政ロシアの領内、西シベリ

アのトベルスクという所に生まれ、亡くなったのは1944年8月31日に東京—シベリアに生まれて東京で没するという数奇な運命を辿った人物です。この人はロシア、オスマン帝国、そして日本で活動して、ユーラシア各地を巡りました。基本的には汎イスラーム主義者—イスラーム教徒の連帯と団結を訴える立場の人物—です。もう一つ特徴付けをすれば、彼はいわば「イスラーム世界と日本とを結んだ男」と表現することができると思います。

この人物の最初の活躍の場は、やはり彼にとっての祖国であるロシアでした。1905年にロシア帝国の中で—ちょうど日露戦争の最中ですが—革命が起り、帝政が大きく動揺します。そして東の間ですが、言論や出版の自由などが認められて、色々な新聞や雑誌がたくさん出版されます。ロシアの中のムスリムも、ようやくこの時期から本格的な政治・社会的運動を展開するようになりました。そういうジャーナリズムの草分け的存在が、イブラヒムの出していた『ブルフェット』という新聞でした。当時としては最先端の議論を展開しており、彼はそういう新聞を出して色々な人々を結びつけ、それまでは政治的に全く無力であったロシアの中のイスラーム教徒—これは人口で言うのだいたい2千万くらい、ロシアの人口の13%くらいです。ロシアといいますと全然違う国のように見えますが、ロシア帝国が中央アジア、コーカサスを越えて拡大してゆくプロセスの中で大変多くのイスラーム教徒の人々を支配下に治めた結果です—その中で彼はリーダーシップを発揮し、ロシア・ムスリム連盟—イスラーム教徒の政治団体—を作り、そこからロシアの国会(ドゥーマ)へムスリムの議員を送るという運動に彼は奮闘します。当時彼は、ロシアの中でイスラーム教徒の諸民族が自治を実現できれば、これが最適である、という議論を展開し、一躍ロシアでは有名な人物になりました。ただ、間もなくしてロシアでは体制の反動が

始まり、こういう議論をしていると新聞は停止に追い込まれ、編集者は追放という憂き目にあったわけです。彼もまたロシアではもう活動できないと知って、大旅行へ旅立っていきます。

その後、彼は基本的にはロシアの外で活動しました。彼の時代というのはまさに帝国主義、列強による植民地統治の時代で、彼はとりわけイスラム教徒の地域での植民地統治を批判するという、大変鋭い議論をあちこちで新聞・雑誌に書いていきます。そして同時に彼は、ムスリムの社会自体も沈滞していて、もっと内側から改革すべきだ、特に教育の改革をはじめとして自分たちを革新していかなければいけないという呼びかけをすることになります。

## 2. 世界周遊：シベリア・日本・朝鮮・中国・インド・メッカ

そういう人物が大旅行をするのですが、最初に中央アジア方面を巡った後、シベリア鉄道でユーラシアを東に向かって旅をして、モンゴルあたりを通過して満洲へ行きます。そしてウラジオストックから船に乗り、日本の敦賀港に着いて東京に来て5ヶ月くらい滞在し、その後、朝鮮半島を経由し、中国、シンガポール、インド、アラビア半島—巡礼もやって—シリア経由でオスマン帝国の首都イスタンブールへ着くという大旅行を敢行しました。いわばユーラシア大陸を時計回りに一周するという大旅行です。

これからイブラヒムが日本にやって来たときの話を詳しく紹介しようと思います。彼は日本に来ていろいろなインタビューを受けるのですが、なぜ日本に来たかということについて、彼自身の説明は、日露戦争でロシアを負かした日本の勝利に感銘を受けた。何故に日本が短期間のうちに発展できたのか、その要因を知りたいと思った、と彼は語っています。彼は色々な人々と面談したりしながら—大臣から庶民に至る色々な人々と親しく交際します—大変詳しく日本と日本人を観察します。彼は日本語は知らなかったのですが、当時日露戦争の直後でもあり、日本にはロシア語の解る人が結構いて、そういう人たちの通訳で話しをしたようです。そして先述したように、日本の発展の要因は何か、そして日本人の美德なるものに彼は大変感銘を受け、やがて彼はそのようなことを旅行記に記していきます。

日本にやって来て、彼はまず日本の新聞社を訪ねます。自分の旅の目的などを紹介するのですが、当時の日本の新聞では、「韃靼の志士」—韃靼、タタール人、彼の属する民族は一般的にタタール人と言います—「露国国民議会の前代議士」—これは実は間違いで彼は代議士にはなっていないのですが、しかし議会で代議士を送る仕事をしていたので実質的にはそう言えるかもしれません—、それから彼は一時ロシアの中のイスラム教徒を統轄する機関の重要な役職に就いていたので、当時の



日本語では「回教管長」—イスラムのことを回教と言っており、管長は仏教の大寺院のお偉いさんの称号です—などと紹介されていました。報知新聞には彼の自筆の、自分の名前をアラビア文字で書いたものが載っており、おそらく日本の新聞にアラビア文字が載るといのは、これが初めてだったのではないかと思います。夏目漱石の日記にも彼のことが出て来ます。それだけ当時の日本では、大変センセーショナルな人物の登場と理解されていたことがわかります。

## 3. イブラヒムが日本で親交を結んだ個人と団体、訪問先

### 【個人】

彼が日本で親交を結んだ個人と団体ですが、個人の方では、著名人では伊藤博文や大隈重信とも会っており、また後に首相となる犬養毅、ポーツマスの講和に反対して盛んに運動を展開した元衆議院議長の河野広中といった人々と交流しました。

特に密接な関係を結んだのは、当時日本でいわゆるアジア主義者として知られていた頭山満とか内田良平といった人々—要するに黒龍会系の活動家—と大変親しく交流しました。

それから軍人関係でも、彼の旅行記では満洲の総司令官を務めた大山巖に会ったと書いてあるのですが、どうもよく調べると、これは大山と乃木希典を混同したのではないかということが最近判りました。彼の書いた別の論考には乃木將軍に会ったと書いてあるので、そのような混同があったようです。それから、日本の軍人で当時参謀本部で要職にありました福島安正—福島はかつて若い頃に派遣されていたドイツから日本に帰るときに、一人で馬に乗ってシベリアを横断して帰ってきて国民的な英雄とされた人物です—とも会っています。

それからジャーナリストとしては『国民新聞』の徳富蘇峰や、当時『日本及日本人』という雑誌などの創刊でも知られている三宅雪嶺といった、同時代の日本では指導的なジャーナリストとも関係を結んでいました。この辺の人間関係を見ていくと、イブラヒムはいわゆる人間力に相当長けており、わずかの間にそれだけの人々と積極的に語り合うという、類い稀な人間であったことがわかります。そして恐らくその背後には日本側の色々な配



---

慮があったと思われますが、その辺のことは史料にはなかなか残っていないので想像するしかありません。

#### 【団体】

団体の中にはいろいろな興味深い団体があるのですが、調べて面白かったのは当時「徒歩主義同志会」という会—みんなで歩こう、健康にも良いしお金の節約にもなるという趣旨の会で、今でいう万歩計のようなものも作っていたようなのですが—があり、誰でも参加することができた。その徒歩主義同志会がイブラヒムを招待して一緒に花見などに誘います。その当時の新聞記事を見ていると、この同志会の幹事が内藤鳴雪という人で—この人は正岡子規の門弟の一人で、この時代の日本では大変名の知れた俳人であったようなのですが—、彼の作った一句「梅の如き人に逢ふたる日和かな」、これは「梅の如き人」というのがイブラヒムでありまして、ものすごく内にエネルギーを秘めたイブラヒムの姿を謳った一句です。またその他、「東亜同文会」という、アジア主義者がアジアとの善隣、とりわけ中国との善隣を目指して作った団体ですが、そういう所とも密接な関係を結んでいました。

彼は色々な所で講演をしています。ある女子高等学校で講演したときの写真がありますが、彼がこの時期日本では相当知られた存在であったことがわかります。また、ある時に日本の団体のパーティーに招かれて、その時参加者に何かアラビア文字で一筆書いて下さいと頼まれ、彼がテーブルクロスに筆で書いたものの写真があります。これはイスラームの預言者ムハンマドが語ったとされる言葉で、学問は中国にあらうともこれを求めよ、という言葉で、要するに中国のように遠く離れた未知の国であろうとも、もしそこに学ぶべきものがあれば学べという、教育を重視したムハンマドの言葉として知られており、後半には、中国になければその付近で求めよ、という説明があります。そしてイブラヒムは、この中国の近くというのは日本のことでございます、と言って人々の万雷の拍手を浴びるんですが、大変スピーチが上手い。そしてこのムハンマドの言葉というのは単なる戯れ言ではなくて、実は19世紀末以降イスラーム世界の知識人が、自分たちの社会が植民地状態にあるわけだが、イスラーム教徒が成長・発展を遂げるためには、異教徒のものであったとしても西洋の技術や知識を学んで自らを鍛えなければならない、という議論をするときに根拠としてよく引用したのです。自分たちを強化するためには、たとえ自分たちを支配する西洋のものであったとしても、学ぶべきものは学ぶべきだという議論のときの根拠として使った言葉、それを彼は紹介したわけです。

#### 【訪問先】

このようにして彼は日本の人々と大変密接な関係を結ぶので

すが、次に訪問先です。実に色々な所へ行くのですが、巢鴨監獄に行った時に、とても立派な建物で、とても監獄には見えなかった、と書いています。その建物を見たときは自分もそこに住みたいと思った、と書いてあります。

それから火葬場に行って日本のやり方を見るのですが、これは彼にとっては大変衝撃でした。なぜ衝撃かというと、イスラーム教徒は遺体を焼きません。土葬にします。遺体を焼くというのは、最後の審判で地獄に落ちる者が焼かれるというイメージにつながるわけです。焼くことの出来るのは神だけで、人間がやってはいけません。そこで彼は火葬場から出て、神に祈りを捧げます。自分は旅の者で一体どこで死ぬかわからないけれども、日本でだけは死なせないで下さい、という願を掛けます。最後彼は日本で死んでしまうのですが、どうなったのかは後でお話します。(その外、造幣局、病院、湯島聖堂、国技館も訪問)

それから、早稲田大学などたくさんの学校（東京帝大、東京美術学校、学習院、成女高等女学校、東京盲啞学校等）に訪問していますが、彼は日本の大変な発展の理由の一つは教育の力にあると見抜きます。日本が近代化を始めた時に教育制度を整えて人材育成を行った、これがイスラーム世界には欠けている、ということを経験して書いています。

それから彼は東京帝国大学の図書館に行きました。これはひとつのエピソードなのですが、日本人の学生がいる中でただ一人だけ西洋人らしき人がいるので、あれは何人か、とイブラヒムが訊くと、図書館員が、あれはロシア人です、と答えました。そしてイブラヒムが訪問した時に東大にいたロシア人という一人しかおらず、これはサントペテルブルク生まれの裕福な家の息子で、エリセーエフという、後にロシア革命で亡命してアメリカに渡り、日本学の教授として大変有名な存在になる人です。当時彼は東京帝国大学の文学部に学んでいて、夏目漱石にも教えを請うていたのですが、このエリセーエフはアメリカに行ってから色々な日本研究者を育てました。その中にはかつて駐日大使を務めたライシャワーさんもいます。またドナルド・キーンさんも彼の下で勉強しました。ただドナルド・キーンさんの回想によると、そのころすでにエリセーエフはかなり年をとっていて、ああ、この先生はあまり勉強していないなのというのがわかった、と書いてありました。我々もそういう風にいられないように気を付けなければならないのですが。(笑)

#### 4. 時代の空気

さて、イブラヒムが日本に来て色々な人々と交流しますが、その時に一番注目されるのがアジア主義者の存在で、そのあたりを少々まとめて考えてみたいと思います。

## 汎イスラーム主義とアジア主義の交錯

そもそもイブラヒムがどんなことを考えていたかという、彼は亡命の身でロシアにはなかなか帰れない。一方ひたすら言論で色々な主張を展開していたのですが、彼の戦略構想を彼の言葉から復元しますと大体以下になるとと思います。

まず現状認識としては、イスラム世界全体—オスマン帝国やインド、その他中央アジア、東南アジアなど—が列強によって従属を強いられている。これが問題意識で、これを何とかしなければいけない。そこに日本という存在が昇る太陽の如く東方に現れた。日本の登場によって、これまで列強が独り占めしていた世界秩序というものが大きく転化・変容するであろう。そのチャンスこそムスリムの諸民族の解放と独立に使える。要するに世界の秩序が転回したときに独立のチャンスが生まれる、というのが彼の基本的な考えなのです。そのためにはイスラム世界と日本、これが連帯し手を結ぶことが重要だということ考えます。これが彼の基本的な考え方と言えます。

当時のイスラム世界でよく読まれていたある風刺雑誌の絵の一つなのですが、モロッコの様子を描いていて、真ん中の羊が色々な獣に脅かされています。ライオンは言うまでもなくイギリスで、虎がドイツ、それからイタリアなどの国々が獣として描かれていてモロッコをいじめているという認識がイスラム世界においても当然ながら存在していました。

また別の絵には、海の嵐に翻弄されるイスラム諸国が描かれています。真中に木造の帆船があって—これはオスマン帝国のこと—船体が裂けつつあります。帝国といえどもガタガタで今にも沈みそうな風景。それから右下がイランですが、船が沈もうとしているのに仲間内でケンカしているというイランの国情。それからエジプトは左下の桶なのですが、籠がはずれて今にも沈みそうな様子です。これは列強によって経済的に植民地化されていて危ないという状況。それからその上のチュニジアはもうほとんど沈んでいますし、さらにその上のインドはゆりかごに赤ちゃんが寝てる姿になっていて、波に翻弄されている。モロッコは筏になっていて、これはまた筏から落ちようとしている。アフガニスタンは小さなボートを漕いでいるのですが危ない。イスラム世界は海の嵐に翻弄されているんだけれども、ヨーロッパは鋼鉄の船で平然と様子を見ている。不思議なのは中国で、何か鯨のような怪獣に描かれていて—なぜこのように描かれているのか少しわかりづらのですが—、右上にもう一隻鋼鉄の船があって、それが日本なのです。日本は海の嵐にあっても安泰である、という認識がこの一枚の絵に描かれていて、そういう認識は同時代のイスラム世界においても共有されていたと考えられます。

イブラヒム自身はイスラム世界を何とかして解放したい、そして



日本に対する期待というものを表明していたわけです。そして日本人との語らいの中でイブラヒムは、日本が発展したのは、近代化するにあたって自分たちの民族的なアイデンティティー、民族精神（大和魂）を失うことはなかった、そこが重要であるとしました。そしてイブラヒム自身は、日本人の間にキリスト教が広まることは断じて許せないという立場です。せっかくそのような民族的な精神を持った人々がキリスト教に改宗することは、日本がアイデンティティを喪失することに等しい、と。これは色々な日本人との語らいの中で大変共感を得るところが大きいのです。日本のアジア主義者たち、いわゆる国粹主義たちはこれを大変強調しておりまして、その辺で意気投合するわけです。一方でイブラヒムはまた、イスラーム世界の、世界の中で占める大きな地政学的な意義というものを強調するわけです。

そして彼自身の思いとしては、日本人はイスラーム教に改宗すれば完璧なイスラーム教徒になる、と—これはあくまで彼の考え方なのですが—。日本人は長幼の序を重んじ、社会のために自らを犠牲にする感覚を持ち、責任感に溢れ清潔を好む。そういった日本人がイスラーム教に改宗すれば模範的なイスラーム教徒になる、と。その話を彼は旅行記に書いてそれが出版された後、イスタンブルで当時大変有名であったメフメト・アーキフという詩人が、イブラヒムの言葉をそのまま受け継いで「日本人」という詩を書きます。その詩の一部ですが「イスラームの信仰は彼の地にあまねく広まる」—要するにイスラームが重視する美德というものは全て日本人には備わっている—「ただその形は仏陀なり」イスラームではない、と。そしてその後を書いてあるのですが「ムスリムの資質を備えるにおいて比類なし」と讃えており、「そこに欠けるは唯一神への信仰のみ」であるから、オスマン人が頑張って布教すれば多大な成果を取めるに違いない、という言葉が書かれています。ちなみにこのメフメト・アーキフという人は大変敬虔なイスラーム教徒で、後にトルコが独立のための戦争をギリシアとか連合軍に対して戦っていくときに

愛国主義を鼓舞した詩人でもあり、現在のトルコの歌詞を書いたのはこの人なのです。ですからトルコ人は誰でもこの人の名前を知っています。そういう人がこういう「日本人」という詩を書いて日本人の美德を讃えた、ということです。その背景にはこのイブラヒムの観察があったということになります。

同時代に出ているある風刺雑誌の一つで、イブラヒムが調べた、日本人がイスラームに改宗するのではないかという話を絵にしたものがあります。富士山をバックに日本人が変な形の刀をかざして「イスラームに改宗します」と誓っています。そして左側の真ん中あたりにイブラヒムがいて、オスマン帝国からの使節団がいるという絵になっております。ただこの絵には大変大きな、面白い落ちがついています。イスラーム世界の人々の中にも、日本人がイスラーム教徒に改宗するなんてことはあり得ないと思える人たちがたくさんいて、この話は絵の中で横になっている人物の夢である、という落ちなのです。だから大変冷静に見ているわけで、イスラーム世界が全体として、日本人がイスラームに改宗するなどと思っていたわけではない、ということの証明になるわけです。いずれにせよこういう日本人の美德をイブラヒムは讃えるわけです。

#### 明治末のアジア主義者との親交

そうすると日本側としてはイブラヒムのことを、大変日本のことをよく解っており、ヨーロッパに対抗しながらアジア諸民族の連帯を実現するために奮闘している、祖国ロシアのイスラーム教徒解放のために頑張っている志士である、そういう呼び方をするようになったわけです。そうやって気脈を通じたアジア主義者たち——この時代はアジア主義という考え方が日本の国内では大変強まっていた時代で、ごく年表的に整理しても、西洋支配に対抗してアジアの諸民族の統合をする、そして日本が主導にあたるべきという考え方は、やはり黒龍会のメンバーが特に強調したものですけども、日露戦争があって、やがて韓国併合—内田良平という人はこれに大に関わった人物ですが—、また辛亥革命が1911年に起こりますが、中国革命への支援という、大変リアルな問題としてこのアジア主義が唱えられていたことがわかります。こういうものはこの時期特有のイデオロギーであったと思われませんが——ここイブラヒムは接点を持ったということになります。

そういうアジア主義のメンバーを訪ねた時の集合写真があります。やがてイブラヒムはこういった人たちと語らって、「アジア義会」というものを作ります。アジアの義のための会、アジアの義というのは要するに、アジアは本来文明発祥の地であって、かつてはヨーロッパ方面に色々な文明の成果を伝えた地域である。しかしその後内部的に衰えて列強の支配するところとなっ

た。これを解放するのがアジアの大義である、という考え方で。ちょうどイブラヒムが滞在中に有志によって結成されました。そしてそこにはアジア主義者と並んで、陸軍参謀本部が絡んでいました。

この会の結成時のときに作成されたと思われる誓約書にはイブラヒムによるアラビア文字での誓約の言葉があって、「我々に一点の異心あるにおいては、天地神明の本罰を受くべきものなり。いったん約束した以上これを違えてはならない」という内容で、ここに大原武慶というアジア主義者のメンバーと、頭山満、河野広中、犬養毅といった面々のサインが並んでいます。こういう人々とアジア義会を作ります。これはあくまで私的な結社で、規模は小さいのですが、やがて雑誌を出すことになります。「大東」という団体を作り、その中にはイブラヒムも加わります。当時のイスタンブルで出ている雑誌には、『大東』というアジア義会の機関誌が発行されて、この団体が目指しているものが書かれた記事が載ります。イスタンブルの雑誌に漢字が並ぶことはおそらく初めてのことだったと思うのですが、ほとんどリアルタイムで日本における動きがイスタンブルにも伝わっていたということがわかります。決してイスラーム世界は遠い存在ではなかったということになります。

#### 日本陸軍とイブラヒム：参謀本部宇都宮太郎少将の日記

こういう団体ができる一方で、日本の陸軍が実はその様子を知って観察しておりました。参謀本部には色々な部があり、第二部というのが対外諜報部門で、日本の安全保障上、海外の情報を収集して、日本がどのような戦略を立てたら良いかを考える部署です。その部署のトップにいたのが、宇都宮太郎という少将です。この人は諜報部門の長ではあったのですが、なかなか克明な日記をつけており、これが最近岩波書店から刊行されました。普通、そういう部署にいる方は記録を残さないのですが、残しておいて下さったおかげでこういうことまでわかるようになりました。

彼はイブラヒムに注目しているわけです。反キリスト教同盟を主張し、これはヨーロッパに対抗するという趣意書を持参し謀るところあり、イブラヒムはそういうことをやろうとしている。ただし余はある時期までは直接には面会せず、と最初の段階では書いてあります。その後イブラヒムを繋ぎおくため、大原武慶に本日本金300円を出すために招ず。このお金は福島中将という彼の上司の管理するものなり—これは秘密の資金なのできつと領収書が要らないのです—。それをイブラヒムに渡したという、あるいは大原武慶というイブラヒムの面倒を見ている人物に渡した—この当時の300円というのはかなり高額で、宇都宮少将の月給よりも多いのですが—ということをやっていたことがわかりまし



た。そして、お金を渡したけれども、その後どうなったのか、一向に報告がないことに対して怒っているのですが、興味深いのは後半の部分で「余の胸中にては、イブラヒムの人物素性も不明なれども、果たして出来そ一ならば（口語体で書いてあります）他日回教徒操縦の道具に利用し、耶蘇教国（ヨーロッパ列強）と対抗の或る場合には利用し得る如く為し置かんと考なり」と。いずれヨーロッパ列強と日本が対抗するときに、イスラーム教徒を日本側に引き付けるための道具として使えるということを彼は率直に書いているのです。これが1910年の段階です。ですから参謀本部は明らかに、イブラヒムに利用価値を見出していたことが分かります。

参謀本部次長福島安正：日本人のメッカ巡礼を提案

更に宇都宮少将の上司にあたる福島安正という人は、参謀本部次長というもつと上の役職にあった人で、前述したようにシベリアを独りで馬に乗って横断したという伝説の持ち主なのですが、彼もやはり、イスラーム世界というのは将来的に日本にとって大変重要なパートナーたり得るという認識でおりまして、イスラーム世界と日本とを結びつけるためには、やはり誰か日本人がメッカ巡礼をしなければいけない、という提案をします。その時に選ばれたのが東京外国語学校、今の東京外国語大学出身の、ロシア語を専攻した山岡光太郎という人物で、彼はイスラームに改宗してやがてイブラヒムと一緒にメッカに巡礼するという、日本人最初の巡礼者になるわけです。

小村寿太郎による日土国交交渉

そういう動きのある中で、実はまた別の局面で日本はイスラーム世界と交渉しておりました。具体的にはオスマン帝国なのですが、当時小村寿太郎が外務大臣で、オスマン帝国と国交を結ぶという話が当時進んでいました。オスマン帝国としては列強が押しつけてきた不平等な条約を何とかして止めさせたいと思っていたので、日本にはぜひ対等の関係で条約を結びたいというように持ち出すのですが、結果として日本は、日本がそういうことをやれば列強との協調を壊すことになるのでそれは出来なくなり、結果としてはうまくいきませんでした。しかしこの時に—最近の面白い研究があります。島田大輔さんの研究なのですが〔島田大輔「明治末期日本における対中東政策構想—宇都宮太郎「日土関係意見書」を中心に」『政治経済史學』第578号、2015年〕、前述した宇都宮太郎が、少数意見ではありましたが、オスマン帝国と対等の条約を結ぶべきだと言っているのです。その見返りに日本はメソポタミア地方に日本人移民を送り込んで、なおかつ紅海やペルシア湾に日本の船が寄港できるような港の確保を目指すべきだ、と。オスマン帝国とそういう関係を結べば、やがてまた再びロシアが脅威となったときに同盟



国が出来る、という戦略を立てるのです。ものすごく大胆なのですが、そういう構想を宇都宮太郎は持っていた、これは実現せずに終わりますが、そういう様々な日本側の戦略があったということは事実であります。

## 5. 戦争と革命の中のイブラヒム

その後イブラヒムはイスタンブルに戻るのですが、彼はその後もジャーナリストとして大活躍して、先ほどのような議論—イスラーム世界の団結によってヨーロッパに対抗すべし、かつ自分たちの社会・文化の発達・発展を目指すべし、—ということを言います。この時イブラヒムと敵対者の関係になったのがロシア首相のストルイビンで、彼はロシアの外務大臣宛ての書簡の中でイブラヒムのことを名指して批判しております。こういう人物が反ロシア的な言論をイスタンブルで展開している。こういう雑誌はイスタンブル駐在ロシア大使館を通して、即刻停止に追い込むべきだ、と書いています。要するにストルイビンというロシア帝国の首相と、彼は言論上で戦っていたということになります。

その後、オスマン帝国はイタリアが攻めてきて、現在のリビアのトリポリで戦争になります。そうすると彼はオスマン軍の兵士を激励するために、わざわざそこまで行きます—彼は大変行動的な人物です—。その時に彼は、前述した雑誌『大東』に長い書簡を送っています。戦争が始まった時に日本はすぐに中立宣言をするのですが、イブラヒムに言わせると、何故そのようなことをするのか。日本の存在感を世界に示すためには絶好のチャンスであるのに、中立宣言をしてはならない、という大変激烈な手紙なのです。宣言をする前にヨーロッパに対して、イタリアの行動は不当である、世界の平和を攪乱しようとする行動だと言って、それに批判的な立場を表明すべきだ、と。そうしなかったのは大変返す返すも残念である、と。逆に言うと、それだけ彼はやはり日本に対する信頼感を持っていたということになります。そういう萎靡振るわざる外交ということをやっていたのでは、ようやく東海の縁に勃興したる旭光、これが全アジアに輝く前に光を失うであろう、という大変強いメッセージを送っています。イブラヒムの心情を大変率直に伝えていると思われます。

その後、彼はオスマン帝国の国籍を取得してオスマン人になります。間もなく第一次世界大戦が始まると、彼は様々な活動に従事しますが、特に興味深いのは、ドイツ軍の捕虜になったロシア軍兵士の中にイスラーム教徒の兵士がたくさんおり、そういう人々を捕虜収容所で集めて新たに「アジア大隊」というものを作って前線に送る、という作業に加わりました。この部隊は実際にメソポタミアの戦線に送られて、イギリス軍—インド人が多かったのですが—と戦っています。戦争はオスマン帝国の敗北に終わりますが、しかしその時にロシアでは革命が起こり、そこでイスラーム世界解放の可能性が生まれて彼は再びロシアに戻ります。しかしボリシェビキ、レーニンたちの政策はイスラームとは相容れないということに気がついて、彼はトルコに戻ります。トルコはオスマン帝国が滅亡した後、ギリシア軍や連合軍と戦って独立を確保し、ムスタファ・ケマル（後のアタテュルク）の指導の下で新しい共和国になるのですが、そこでは政治と宗教を分ける。汎イスラーム主義のようなイデオロギーは無用であるという立場ですので、イブラヒムの出る幕はなくなってしまいます。しかし彼は歳をとってもずっとそういう夢を追いかけていてなかなか政府の言うことをきかないので、憲兵の監視がついてしまうぐらいになります。そういうところにアンカラ駐在の日本の大使館付武官が訪れてイブラヒムを日本に呼ぶということになるわけです。これが1933年のことでした。

## 6. 再来日したイブラヒム

イブラヒムは1933年に来日して10年ほど東京で暮らすことになります。相当高齢ですが、彼は大変筆の立つ人物で、様々なところに論説を書き続けます。当時日本では「世界回教諸国ニ「日本」ヲ紹介スル唯一ノ雑誌」と銘打ってある『ヤング・ヤボン・モフビレ（新日本通報）』という月刊誌が出ていました。アラビア文字で、かつ言語としてはタタール語です。とても珍しいもので一体誰が読んだのか不思議な雑誌なのですが、法隆寺の伽藍を撮った写真など、毎号日本の風物を撮った写真があります。日本の歴史や文化・慣習を説明したり、あるいはイブラヒムが色々な世界情勢について大所高所から議論した論文が載ります。

この『新日本通報』に載った論説で一番興味深いのが「アル・ジハード」—まさにイスラームの聖戦のことです—という論説です。この内容ですが、第一次世界大戦が終わって、世界の情勢はかなり変わるが、再びまた大きな戦争が来るだろう、というのが彼の認識です。第一次世界大戦ではイスラーム諸民族はいろいろな意味で動員されたり物資を供出させられたりして苦しんだ。しかし結果として得るところはなかった。そういう現

状を前にして来たるべき戦争の時には失敗をしてはいけない。その時には日本と手を組んで戦うべきだ。これはイスラームにとっては聖戦なんだ、という論理です。やがて大日本帝国は自らの戦いを聖戦と称しましたが、それより遙かに先立ってイブラヒムはイスラームの聖戦という文脈でそれを語っているという、大変先を見ていたということになります。このジハードは全てのムスリムにとって義務であるということをイスラームの指導者たちは説くべきだというメッセージになっています。これは日本側、とりわけ参謀本部からすれば実に有益なメッセージです。

そのころ出た本の中に『回教世界と日本』という本があって、日本がイスラーム世界に対してより積極的に協同する姿勢を示すべきだということを説いた本です。それにイブラヒムは題字を書く依頼をされて書いているのですが、若干表現が変わっていて、イブラヒムが書いたアラビア文字の部分には「イスラーム世界における日本」とあったのです。彼はイスラーム世界の中に日本を取り込んだような感覚で書いているわけです。本の書名は『回教世界と日本』なのですが、その辺に両者の見解にずれがあるということがわかります。

日本ではそういう対イスラーム政策を目に見える形にするために、1938年に東京の代々木に初めてのモスクを作ります。その時東京には、ロシア革命後日本に亡命してきたタタール人が少なからずおり、そういう人々が主体なのですが、東南アジア方面からのイスラーム教徒の留学生も日本には段々やってくるようになってきて、そういう人々にとって日本のイスラーム世界に対する友好のシンボルとなるように期待したわけです。今はこの建物は老朽化して完全にトルコ式のモスクに生まれ変わっていますが場所は同じです。

1930年代になって日本は大日本回教協会という団体を作ります。東亜新秩序、東アジアに日本を中心にした新しい秩序を建設するにあたってイスラーム教徒の諸民族は大変重要な存在であり、イスラーム教徒の諸民族との友好を促進するためにこのようなものが出来たわけです。大日本回教協会は色々なメッセージを対外的に発するにあたって、イブラヒムに大変期待するところが大きかったわけです。晩年のイブラヒムが自宅で礼拝している写真がありますが、こういった写真も日本がどれほどイスラーム世界に友好的な姿勢を持っているかを示すために使われたわけです。

そして晩年になって、日本海軍が東南アジアのイスラーム教徒向けに映画を作るのですが、その時にイブラヒムにも出演を求めて、彼は撮影に応じます。ただ夏の間の暑い時期に撮影に協力した結果、体調を壊して亡くなってしまいます。当時その様子を大日本回教協会のメンバーとして見ていた古在由重という



人—彼自身はマルクス主義者なのですが—が、日記の中にその様子を大変リアルに書いています。そして亡くなった彼は多磨墓地に埋葬されるのですが、多磨墓地には当時イスラーム教徒専用のスペースが設けられていて彼は無事に土葬で埋葬されました。

この後は少し余談になりますが、この晩年のイブラヒムという人物はある日本の若者と親しくなります。その人が後に日本を代表するイスラーム学者になる井筒俊彦です。当時日本ではアラビア語を学ぶ機会はほとんどなく、特に生のアラビア語を聞いて練習するような機会はなかったため、井筒さんは—当時まだ慶応大学の助手でしたが—イブラヒムの元を訪ねて、アラビア語を教えて下さいと頼みます。そうするとイブラヒムは、俺はそんなことのために日本へ来ているのではない、俺はもっと大きな仕事をしていると言って断るのですが、あまりにも井筒さんが熱心に頼むのでアラビア語を教えた。ついでにイスラームについても語るのですが、やがてイブラヒムは、俺よりもっと立派なイスラーム学者がやって来るから彼について学べ、というアドバイスをします。ロシアからイブラヒムの古い仲間であったムーサー・ビギエフという人が亡命者としてやって来て、井筒さんは彼からイスラームの最新の学問を学びます。井筒さんが書いているところによると、このビギエフという人は亡命者でお金がなく、下宿を借りるお金もないため、ある下宿屋の押し入れを借りており、押し入れから出てきたというのです。それである日、ビギエフが井筒さんに質問します。お前はずいぶん色々な本を持っているようだけれども火事になって焼けたらどうするのだ、と。井筒さんが、そうなったら勉強できないから諦めますと言ったら、そんなことじゃいかん。本は全部読んで頭の中にたたき込んでおけ、と。それがイスラーム式の学習で、全部暗記で、基本的な文献は全部頭に入れておけ、という教えなのですね。井筒さんはその後大成しまして、岩波文庫の『コーラン』の翻訳も井筒さんがされており、世界的に名を成す人となります。井筒さんの色々な仕事が後の日本のイスラーム研究にも大きく影響を与えたわけですから、そういう意味ではイブラヒムにもそういう功があるかと思えます。

### おわりに：三つの帝国を看取った男

年表を作り、イブラヒムを一つの軸にして、イスラーム世界とロシア・ソ連と日本とを並べていくと、彼の生きた時代というのがいかに動態のある時代であったかということがよくわかります。二つの世界大戦といくつもの地域的な戦争、加えて革命が目白押しになっており、そういう中で彼は—貫してイスラーム世界の解放と自立を求めたわけですが、彼の思考自体はやはりこの時

代特有の「帝国」というものに彼自身もやはり囚われていて、そういう一種のパワーポリティクスの中でのことを考え発言していたということがわかります。一方で日本のほうの展開を見ていくと、やはりこれも世界の流れと実に軌を一にしており、その中でイブラヒムの発言を拾っていくと、イスラーム世界の側から見た日本というのもある程度浮かび上がって来るというのが言えると思います。

彼は、別の表現をすれば「3つの帝国を看取った男」とも言えます。3つの帝国というのはオスマン帝国とロシア帝国と大日本帝国です。彼の亡くなった時はまだ日本は戦ってまいりましたが、事実上もうどうしようもない状況にあったことは皆さんご承知の通りです。明治の末期から昭和19年、日本の近現代史の流れとイブラヒムの活動というのは大変交錯しておりまして、日本の近代を振り返る時にも一つの参照軸になり得るものではないかと思えます。ですからこういう色々なことを辿っていきますと、イスラーム世界と日本というのは決して遠い離れた存在ではなく、実は相当深く関わっていたということがわかります。だから日本の近代史の一部としてイスラーム世界との関わりを考えていく必要があるのではないかと思います。

それからイブラヒムという人物ですが、実は彼は長いこと忘れられていました。この時期大変名声はあったのですが、大日本帝国は崩壊しますし、そういうイスラーム政策があったということも—日本人は得てしてすぐ忘れてしまうのですが—何事もなかったかのように忘れられてしまいます。彼は実はトルコでも忘れ去られていて、やはり汎イスラーム主義というのは新しいトルコ共和国とは縁が無いということですから、それについて研究しようとする人もいなくなります。ソ連はどうかと言えば当然ながら宗教は不要だと考えている国ですので、汎イスラーム主義というのは反動的なイデオロギー以外の何ものでもないわけですから、そういうことを主張した人物のことは一切研究は出来ないし言及も出来ない。

ですから完全に忘れ去られていたのですけども、ソ連が解体して色々な自由が復活すると、故郷のタタルスタンではロシア革命の時期に活動した民族的な英雄の一人として再評価が始まります。それからトルコでは—エルドアンといういま豪腕の大統領がいますが—イスラーム政党、公正発展党というのが段々力を伸ばしてきて、イスラーム的な価値への再評価が高まる中でイブラヒムにも光が当たるようになり、そういう意味でイブラヒムの活動についてはトルコでも結構研究が出るようになりました。そういう中で日本において日本の研究者がやるべきことは—これも最近若手の研究者たちがいろいろと研究を始めていますが—イブラヒムが日本とどのような関係を持ったのかということを実証

的に研究しておく必要があって、それを基にタタルスタンやトルコの研究者と議論する必要があると思います。何もなかったわけでは決してなく、そういうことをきちんとおさえる必要があろうかと思います。

それから先ほど触れた『漱石日記』の一部ですが、「本間久、ダットン人の回々教の管長と事を共にする天下の志士を連れてくるといつてくる。この人、余（漱石）が著作を好んで読むよし。奇人だから材料にしたらどうだと書いてある。」と、イブラヒムのことが間接的ながら言及されていて漱石も知っていたということです。それから先ほどの古在由重という人物の「戦中日記」には「ゆうべ九四歳の老翁イブラヒムが死んだという。この老翁こそ大日本回教協会の「うりもの」だったのに。協会は彼についてのいろいろな潤色や仮構をおこない、そしてこれによって自己の回転をつづけてきた。私もまたこのような「聖人」の「製造工程」に参加した者の一人である。イブラヒムの死はひとつの短編の材料となることができよう。」とあります。また葬式当日その場に行って状況を書きとどめる。さっそく参謀本部からの注文で「イブラヒムの逝去」という短文を書く、とあります。だから大日本回教協会はイブラヒムが死んだ後も、彼の大義というものを対外的に発信して宣伝していた。まさにそういうインサイド・ストーリーを彼は大変リアルに書いています。このあたりが恐らく本質を突いていると思うのですが、そういう人生をイブラヒムは送りました。彼は最期亡くなる時に自分がムスリムだということを3度繰り返して亡くなったと言われていまして、彼としては恐らく決して日本に使われたというのではなく、自分としてはイスラーム教徒としてのやるべきことを全うした、という意味の表現ではなかったかと思いますが、こうやって彼の一生が終わるわけです。たまたま多磨墓地のいうのはいま私が勤めている外語大のすぐ近くであって、タタルスタンの方が来ると一緒に行つて墓参りをしてくるのですが、何か縁がありそうな感じです。以上で私の報告を終えたいと思います。

#### 質疑応答（敬称略）

**質問**（札幌啓成・横山）：このイブラヒムという人物について大変感心する一方で、疑問も浮かびました。この人が西シベリア出身で極東の日本と繋がりやすく、その日本が強くなってヨーロッパ中心のこの勢力関係に異変が生じて、イスラームと手を組むことによってイスラームが領土回復をしていく、という話をされたかと思うのですが、むしろ日本が目指していたというのは福沢が言っていたような「脱亜入欧」、つまり日本も欧米列強と同じ肩を並べる一国になるのである。ということはイブラヒムにとって敵である欧米列強と同じ方向を日本は目指しているということ



になり、その日本と手を組むということにすごく違和感を感じたのが一点です。

もう一つは、イスラーム教徒の勢力拡大ということを考えるのであれば、例えばパキスタンやインドネシアなど、すでにイギリスやオランダの植民地支配を受けているんだけど、イスラーム教徒が多数いるところに行つて手を組んで、例えば日本の支援を借りて解放するという発想はなかったのか。この二点をお聞きしたいと思います。

**回答**：当然ながら当時の日本においてはそういう福沢論吉タイプの西欧志向という流れもありました。一方ではアジア主義者のように、アジアとの連携が最も重要で、そのために日本が中心となっていくという考え方もあり、後者の場合にはやはり日本の伝統、アイデンティティを大切にしなければいけないという側面があったわけです。その中でイブラヒムは特にアジア主義者のグループと密接な関係を結んだわけで、日本の西洋志向派の人たちとはあまり関係を結んでいませんでした。彼からするとパートナーとなり得るのはあくまでも日本のアジア主義者であるということです。だから彼は日本全体を見ていたわけではなく、特定の潮流に最も波長が合つて、そこと連携するということになったというように考えられます。そこをまた日本の参謀本部も着目して彼を使える人間だと認識したということがわかります。実は宇都宮太郎という人は第二部の部長をしていて、1910年にイブラヒムに着目したわけですが、1933年にイブラヒムを再び招くときにやはり動いていたのは参謀本部第二部で、一貫してそういう方向で彼をマークしていたということがわかります。

それから、この時代のイスラーム世界の知識人の考え方というのは、自分たちの従属状態をいかにしてそこから脱するか、自分たちの独立した国家を持つなり、経済的な従属関係を断ち切ることであつて、決してイスラーム世界を拡大することではないわけです。あくまでも相手は列強で、列強に対抗する上でパートナーを求めるとすれば、イブラヒム流に言えば、パートナーとなり得るのは日本であろうと。そこを手を結ぶことによって初めて道は開ける、と彼は考えたのです。先述したように、彼の考え

方はこの時代のパワーポリティクスの議論にかなり制約されている面があって、そこが彼の限界だと思います。実際に彼は亡命者であって、特定の民主運動とタイアップして活動できないという状況ではないわけです。ですからどうしても議論はそのような論調になって行かざるを得なかったのだらうと思います。だからあくまでもそジャーナリストとして活動していて、彼の論理の中で日本というものが決定的に重要だと考えたわけです。同時代のイスラーム世界には、やはりイギリスなどと対抗する上には、ナチス・ドイツをあてにした方が良く考えた人もいて、相当入り組んだ関係になっているのです。なかなか単純に言えないのですが、そういう流れの中にイブラヒムがいたと言えると思います。

**質問**（札幌大谷・越野）：3つほど質問があります。一つ目はイブラヒムが書いた雑誌というのは何語で書かれていて、どこの地域を流通していたのかという疑問です。なぜかという、2つ目の質問とも関係しますが、イブラヒムが影響を与えたイスラーム世界というのは具体的にどこの国のどういう人たちのことを指しているのかというのがわからなくて、日本人のアジア主義者の人たちが考える、イスラーム世界と協力しよう、と言ったときのイスラーム世界のグループと、イブラヒムが実際影響を与えることの出来たイスラーム世界の人たちというのは重なっているのかというのがよくわかりません。これは現代情勢にも関係してくるのですが、イスラーム世界は実は中は多様で色々なファクターがあって、ひとまとまりではないのですが、どうしてもひとまとめでしてしまうので、具体的にわかったら教えて欲しいと思います。そして3つ目なんですが、先ほどの、イスラーム世界を風刺的に描いた船の絵がとても面白くて、可能であれば授業で使ってみたいなあと思ったのですが、どこから引用されたのか教えていただければと思います。

**回答**：彼が出した雑誌というのは実はたくさんあって、ロシアで最初に彼が出していた時はタタール語—トルコ系の言葉のひとつで、ロシアの中に住むイスラーム教徒であればだいたい読めた。だけど当時まだ文章語が統一されていたわけではないので、決して皆が皆読めたわけではないのですが、知識人であればだいたいタタール語が読めた。その後、彼が国外に出て主としてイスタンブールを中心に活動するのですが、その時に出した雑誌は全てオスマン・トルコ語—アラビア文字を使ったトルコ語—で書かれていました。彼はもともとトルコ系の生まれなので、タタール語もオスマン語も両方楽々と書くことが出来ました。

面白いのは、当時はアラビア文字を使って書くと、トルコ語にたくさん出てくる母音をあまり表記しないので、読めば通じてしまうのです。話し言葉と違うので共通にわかるのです。ところがその後現代になってそれぞれの国が国語を制定して、アルファ



ベットをアラビア文字からラテン文字やキリル文字にしてしまうとそれぞれの言語が個別化されて通用できなくなってしまうのです。そういう、アラビア文字を使って自由にコミュニケーションできる時代に彼は生きていました。そしてオスマン語を使って彼が書くと、それを読めるのはオスマン帝国のトルコ系の人々、ないしロシアの中に住んでいるトルコ系のイスラーム教徒です。ですからイランとかアラブはそこにはなかなかアクセス出来ません。ただイブラヒムはイラン人向けの論説も書いていますし、時々アラビア語を使って論説も書いてるので、時に応じてアラブ人に向けて書くということもありました。ただ基本的にはオスマン語です。

その後日本に来た後の彼の論説はまたアラビア文字のタタール語なのですが、実は当時そういう雑誌を読んでスラスラと読むことが出来た人は一体誰かという、ほとんど思いつかないのです。当時すでにソ連があったので、ソ連の中にああいう雑誌を持ち込んで読むことは事実上不可能だったのです。ですから読むことが出来たのはタタール人の亡命者か、トルコ人ならばアラビア文字で書かれている以上はだいたい読めたと思うんですが、読者層は大変限られていた。にもかかわらず日本ではそういうものを出していた。これまた奇妙な話ではあるとは思いますが。

それからイスラーム世界というのはご指摘の通り実は多様で、そもそもイスラーム世界という言葉を使うこと自体おかしいという議論もあるのですが、イブラヒム自身は一貫してイスラーム世界はある、と言います。イスラームの教えに従う者は全て一つの共同体にまとまるべきだ、というのは彼の基本的な立場であり、言語の別とか民族の別はそこでは関係ない、というのを建前として言います。ただ実際に彼が書いているものを読んでゆくと、彼が一番シンパシーを持っているのはイスラーム教徒のトルコ系の人々と思われまます。ただ大きな議論をする時に彼は必ず、イスラーム世界は一つにならなければならない、ということ言うわけです。ですからこれはあくまでも彼によって想像されたイスラーム世界というように考えてよろしいでしょう。ただそういう議論をこの時代の人々は好んでやっていました。現代だとなか



なかやらないですが—イスラム国は一度そういうことを言い始めましたが、誰も信用しなかった—。イブラヒムの時代はそういうことがまだ言える時代の空気があった様に思います。しかしその後、それぞれの国民国家が出来てくると、そういう議論はなくなっていき、むしろイスラム教徒の団結というよりは国民国家の中の統合という方向に人々の関心が向いていったと思います。彼自身はジャーナリストですので、厳密な概念の整理ということを中心とせずに自由にイスラム世界というのを打ち出して語っているわけです。だからその時代でも、イブラヒムに対してそれは違うだろうという異論を唱える人は結構いて批判する人もいましたし、決してイブラヒムの言説が全体をリードしていたというわけではもとよりありません。

それから先ほどのスライドは『モラー・ナスレディン』という今のジョージア（グルジア）のトビリシ、当時はロシア領のコーカサスで出ている風刺雑誌で、その雑誌はカラー版でたくさん

風刺画を出していたことで知られていて、ものすごくリベラルな感じで、イブラヒムのことも、お前の言っていることは違うんじゃないか、といういちやもんをつけています。それがソ連が解体してから全部復刊されてパクーから出ています。ただこの風刺画はだいたいの場合説明がついていません。当時の雑誌は多分意図的にやったと思うのですが、皆が皆文字を読めるわけではないので、絵で示した方が判り易いだろう、だから敢えて文章では説明しない、見ればわかるだろうという感じですが。だからある程度こちらの方でそれを推測しなければならなのですが。あと東京外語大には『モラー・ナスレディン』のオリジナル版が、最初の年については1年と少しくらいはあって、Web上でも見ることが出来ます。外語大のサイトを見てると出てくるのでどんどん活用していただければと思います。絵の中には日本も出てきます。

## 講

## 演

## II

### 「実施可能な歴史総合カリキュラム案の検討」

東京大学名誉教授（高大連携歴史教育研究会会長）

油井 大三郎

#### I はじめに

この研究会でお話しさせていただくのは2回目になります。1回目は2011年の8月に呼んでいただき、ちょうど学術会議が世界史未履修問題の解決策として、「歴史基礎」「地理基礎」という2つの科目を新設して、それを必修にしたらどうかという提言をしようとした最中にお邪魔してお話をしました。その時、私自身も世界史と日本史を統合して「歴史基礎」という科目を必修にするということ自体は良いことだと思っていましたが、それが実現するという点については、正直あまり自信がありませんでした。

ところが6年経ち、文部科学省が「歴史総合」と名称は変わっていますが、かなり似た案で実施という段階まで入っています。そのため、中身をどうしたら良いかということはかなり大問題で、学術会議としては、教育現場では通史的に教育がされてきた傾向が強いので、やはり近現代の通史として教えた方が良いのではないかと提言をしてきたのですが、中教審ではそれを大きく変えて「近代化」「大衆化」「グローバル化」というテーマ史の方向に転換しようとしています。学術会議が考えてい

たものと形式は似ているのですが、内容はかなり異なったものになりそうだとということで、その違いをどう埋めたら良いのかということを中心にお話しさせていただきたいと思っています。

最近しきりにアクティブ・ラーニング、中教審の答申ですと「主体的で対話的で深い学び」が小中高の全科目に導入されたということで、そういう意味では、戦後の日本の教育政策の大転換期に来ているのではないかと思います。アクティブ・ラーニングとは何かということは色々ところで議論がされていますが、一つの背景としてはOECDのPISAテストの衝撃だと思います。3年に1度テストが行われますが、他の先進国の子供達の状況と比べると、数学ではとても高い点を取りますが、読解力は必ずしも高くない。例えばこれは古いデータですが、2000年では数学は1位でしたが読解力は8位でした。2003年になるとこれが12位に落ちているということで、問題の意図を的確に把握し、自分で考えて知識を応用する力が日本の生徒たちは弱いということが明らかになってきました。そういう能力を高める新しい学力として、コンピテンシーとかリテラシーということがしきりに言われるようになり、それが次期学習指導要領で、主体的で対話的な深い学びというものが全学年の全科目に導入されるということになった背景だと思います。

ですから「OECDショック」という言い方が時々されますけど、これはある種の黒船みたいなものです。OECDという他の先進国の教育関係者のプレッシャーが日本にも及んできている。あ

る種、教育の面でのグローバル化というものの表れだとも思います。グローバル化の時代では、正解のない難問が続出し、暗記的な知識だけでは対応できなくて、「課題を発見する力」「分析する力」それを「表現する力」「討論する力」「新しい知識を活用する力」というものが問われるということが言えると思います。

ところが他方、日本では2006年の教育基本法改正に見られるように、我が国と郷土を愛する態度の育成が重要だということを言われており、どちらかというと内向きなナショナリズムに沿う教育、愛国心教育をするといった方向性も同時に出ているという訳で、少し矛盾しているのです。グローバル化に対応するということと、愛国心を育成するということが矛盾した現象として出ていると思われまます。その矛盾を解決するためにも、東アジアという場の中で、歴史教育の交流を進めていくことがとても大切ではないかと考えています。思考力を育成するためには、教科書に書いてあることをそのまま覚えるというのではなく、教科書に書いてあることも一つの解釈だ、というように別な解釈もあり得て、複数の解釈を示して生徒に考えてもらう。そういうことがアクティブ・ラーニング時代の歴史教育だと思うのです。例えば、日中韓で、歴史問題で色々対立がありますが、そういう場合には日本の解釈と、中国の解釈、韓国の解釈を並べてみて、それで生徒に考えてもらう。そういう複眼的な教育というものがこれから益々必要になり、そういう流れの中で「歴史総合」が新設されることになったのだと思います。

ご承知の通り2006年秋に世界史未履修問題が発覚しました。生徒は小・中では日本史を中心に学習しており、高校になってから初めて世界史を習います。そのため、覚える内容が多いこともあって苦手意識が強く、大学受験でも敬遠される傾向の中で未履修問題が発生したと思います。ですから世界史教育の中身を愛えていかないといけないということがここで提起されたのだと思います。

一方、地理の方では、世界史が必修化されて以来、地理の先生が定年でいなくなると世界史の先生を採用するという形で、地理教員が減少してきました。さらに地理を履修する生徒も減ってきたということで、地理学会は非常に危機意識を抱いており、地理の必修化を強く主張していたようです。今回、「歴史総合」とともに「地理総合」も必修になったということで、地理の先生も一安心されているようですが、歴史教育にとっても空間的な知識、地理的な知識というのは不可欠なので私自身はそのことは良いことだと今は思っています。学術会議では2011年8月に、世界史と日本史を統合した「歴史基礎」と「地理基礎」の必修化を提言し、日本橋女学館や神戸大附属中学校でそれが実践されてきました。



そうした実践を踏まえ、昨年12月に次期学習指導要領の答申が出され、「歴史総合」「地理総合」各2単位が新設・必修化されることになりました。そしてB科目に対応した「世界史探究」「日本史探究」各3単位を選択するという方向性が出てきたわけで、目下、次期学習指導要領が作成されている最中です。12月頃には公布・公示されてパブリックコメントにかけられ、2022年度から実施の予定だと聞いております。

このように大きな転換期を歴史教育は迎えているわけで、暗記中心の教育から思考力育成型教育に転換する必要があるし、細かい用語の暗記力を問うような大学入試の出題改革も進める必要があります。そのためには、教科書および大学入試の出題用語の精選が不可欠で、高大連携歴史教育研究会では目下、「世界史B」「日本史B」の用語の精選の第一次案を作成中です。たぶん秋には皆さんにお示しできると思います。調べましたら1950年代の日本史や世界史の教科書は、索引で拾うとだいたい1500語位しかありませんでした。ところが現行の教科書では3800語位にふくらんでいます。改定のたびに用語が膨らんできたわけで、これは新しい研究成果を導入するというポジティブな面もある一方、大学入試で出題されるとその用語を次の改定時に教科書に取り入れるという形で、高校の歴史教育が過重負担を負わされるという問題点があったように思われます。いずれ第一次案が出されましたら、ぜひこの研究会でも検討していただき、精選について議論していただきたいと期待しています。

「歴史総合」が作られたことに対して、世界史必修のままが良いとお考えの方々の間では非常に強い反発があると聞いています。しかし、日本史を必修にしろという意見が一方であった訳で、小・中はほとんど日本史中心で、ここに来てまた日本史必修になったら世界史的な知識はほとんどゼロのまま、社会人になったり大学に入学したりすることになりかねなかった訳です。「歴史総合」という形で日本史と世界史が統合した科目が新設、必修化したことは良いことだと私は思っています。しかも、日本史と世界史の統合科目の必要性というのは非常に古

くから—上原専祿さんのころから言われ続けてきたことです。ところが日本史と世界史の2本立てで今までできた時に、日本史の先生は世界史に関心を持たず、世界史の先生は日本史に関心を持たない、というようになり壁ができていたように感じました。こうした中、とうとう統合科目ができます。戦後の日本の歴史教育の中で、初めて日本史と世界史の壁を越えて交流しなれない科目ができたということをもっとポジティブに捉えても良いのではないかと思います。一方で、世界史必修が廃止されますので「世界史探究」は選択科目になり、履修する生徒が激減するおそれがあります。さらに小・中は日本史中心なので、高校でもそのまま勉強して大学受験を日本史で受けるという生徒が今後一層増える心配が確かにあると思います。「歴史総合」の中で世界史の面白さをアピールし、「世界史探究」を選択する生徒を増やしていくことが今後の非常に大きな課題になるのではないかと思います。

## II 「歴史総合」に関する中教審答申の基本的特徴

そこで「歴史総合」というものをどういう風に受け止めていったら良いのかということですが、答申で語られているのは次のような原則です。

- ①「世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代の歴史を理解する」
- ②「歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を学ぶ」
- ③「歴史の大きな転換に着目し、単元の基軸となる問いを設け、資料を活用しながら、歴史の学び方（「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得する」

というものです。この歴史の大きな転換に注目するということから「近代化」「大衆化」「グローバル化」というテーマが発生してきているということです。

また、4大項目で構成するというので、まずは「導入」の「歴史の扉」では中学の学習を振り返り、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を題材に、歴史を学ぶ意義や学び方を考察します。

それから「近代化」については、近代化の前の各地域の状況（日本と世界の交易など）、産業社会と国民国家の形成を背景とする人々の生活や社会のあり方の変化を扱う。

「大衆化」では、大衆の社会参加の拡大を背景として、人々の生活や社会、国際関係のあり方の変化を扱う。

「グローバル化」では、グローバル化する国際社会を背景として、人々の生活や社会、国際関係のあり方の変化を扱う。



というように3つのテーマの扱い方について説明がされている訳ですが、同時に興味深いのは学習内容の焦点化ということが言われていることで、「自由と制限」「富裕と貧困」「対立と協調」「統合と分化」「開発と保全」などの現代的な諸課題につながる歴史的状况を取り上げます。これは「公民」の発想の影響があるようで、「公民」で教えているような要素を歴史教育にあてはめていくというような面があると思われます。

歴史の学び方については、比較や類似・差異の明確化や因果関係などで関連づけ、事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察することを教えるというような方向性が示されています。

この「歴史総合」案の最大の問題点は、「近代化」「大衆化」「グローバル化」というようなテーマで歴史を教えるというやり方です。今までは教育現場では通史的に教えるということが主であったため大きな転換になるので、現場では戸惑いとか、混乱とかが発生する可能性が大いにあると思います。そのため、非常に教えるににくい科目だという受け止め方が発生する心配があります。

## III 「歴史総合」カリキュラム作成の基本的観点

東京に高校歴史教育研究会というのがあり、この第1次の研究会で2010年にアンケート調査を行いました。皆さんの中にそのアンケートに協力していただいた方もいると思いますが、2010年の夏に2ヶ月をかけ、700人程度の方が回答してくれました。そこでは「歴史基礎」の新設を支持するという方がかなりの比重を占め、用語の精選が必要だということにもポジティブな意見が出されました。それが第2次高校歴史教育研究会という形で関東を中心に存続しており、これから皆さんに紹介しようとしている「歴史総合」のカリキュラム案はその研究会で出てきたものであります。ただ、その研究会として報告する訳ではなくて、私個人の資格で報告させていただきたいと思います。

答申における「歴史総合」案では大単元（大テーマ）中心に構成されており、従来の通史中心の歴史教育から大きな転



換を図ろうとしています。そのため、現場での混乱が予想されています。

以下の案は、テーマ史と講義の接合によって現場での混乱を少しでも緩和したいと願って考えた案です。具体的には、各章の冒頭に、各節で扱うテーマの相互関連を示す概観・年表を配置します。そして、各テーマを通史の中に位置づける工夫をしたかどうかを考えています。

また、「近代化」「大衆化」「グローバル化」の3大単元（大テーマ）の開始時期に注目し、各部を配置するつもりです。「近代化」は18世紀後半から、「大衆化」は19世紀後半から、「グローバル化」は20世紀後半からです。

第1部は「歴史の扉」なので、第2部が「近代化と私たち」、第3部が「大衆化と私たち」、第4部が「グローバル化と私たち」という形で3つの大テーマをそれぞれの部に配置します。その際、大テーマの歴史的前提として前近代の特徴を各部の冒頭の章で扱うことで、前近代と近現代の時代的差異の理解を促してはどうかと考えています。中教審の答申では、「近代化」の冒頭のところでアジア域内貿易という形で前近代を入れることになっています。前近代についてはそこだけで、他の「大衆化」や「グローバル化」について扱うところでは前近代についての言及は無いので、前近代の比重が非常に弱くなります。そうすると前近代と近現代を対比してこそ近現代の特徴が出てくるので、かえって近現代理解が狭まってしまうのではないかという恐れを感じ、私たちの案では「近代化」「大衆化」「グローバル化」それぞれの冒頭の章で前近代を扱うという工夫をしています。

同時に各大テーマは現在にまで続く趨勢なので、例えば「近代化」を欧米のそれだけに限定せず、グローバル化時代に発生したアジアの工業化などと結び付けて説明するようにしたらどうかと考えています。

各部の大単元を中単元に分解してそれを章とします。中単元をさらに分解して小単元を節にします。各節には主要な問いを設定し、その問いを考える手がかりを本文と史資料の中から得られるように工夫します。例えば「近代化」の場合、「民主化」「工業化」「アジアの植民地化」を中単元として、民主化の中は「主権国家」「市民革命」「制限選挙」などを小単元として配置していくということです。各部の終わりに大問、章の末に中間、節の最後に小問を設けて絶えず問いを設定することで考えさせる授業にしていってどうかと考えています。

小単元を節に配置してその小単元に関する中学での学びの整理をし、新たな史実の講義を1時間かけます。もう1時間では、本文と資料の関係との関連に注目し、設問に対して調べ学

習やグループ討論を通じて解答を促すことで思考力の育成を促進します。つまり2時間をかけるということです。1時間は授業の解説、もう1時間では調べ学習や討論にあてるという形で各テーマを非常に限定します。テーマを限定しないといけないので、その「近代化」「大衆化」「グローバル化」という大きなテーマのもとで、どうしても必須と思われるような小さなテーマを節にして、その節を2時間でやります。その主体的で対話的で深い学びというアクティブラーニング的要素を、そのような形で導入したらどうかと考えています。

各大テーマを説明する際には、「自由と規制」など相互に矛盾する5つの焦点化基準が設定されている点を重視し、各単元を説明するにあたっては意識的に相互に矛盾化する歴史的事例を配置します。例えば、欧米では市民革命が進行しても植民地・奴隷制が拡大する。アメリカ独立革命の典型的な例ですが、そのように市民革命が進展して平等が実現する一方で、なぜアメリカなどでは奴隷制が拡大するのかなど、そういう一見矛盾したテーマを意識的に取り上げて、生徒に考える面白さというものを味わってもらったらどうかと思っています。そのように焦点が5つありますが、その「焦点a」とか「焦点b」という形で、それぞれバランスを考えて配置していきたいと思います。

「歴史総合」の単元（テーマ）関連図というものを考えてみました。焦点化基準として「自由と規制」「富裕と貧困」「対立と協調」「統合と文化」「開発と保全」というものが並べられています。そして大単元として「近代化」「大衆化」「グローバル化」が並べられている訳ですが、「近代化」を構成する中単元としては「民主化」「人権保障」「工業化」「非西洋の植民地化＝西洋化」「西洋古代民主政」、「大衆化」を構成する中単元としては「男性普通選挙制」「女性参政権」「教育の普及」「マスメディアの発達」「民族主義の興隆」、「グローバル化」を構成するものとしては「世界の一体化」「覇権の成立」「国際機関の発達」「地域統合」「情報の国際移動」、そういうような中単元を考えて、その中単元をそれぞれ節に分けて説明してはどうかと考えています。

前史として前近代を扱いますが、近代化で成立してくる民主化とか人権というようなものを考える上では、前近代が身分制の社会であったこと、農業中心の社会であったこと、西洋の膨張が始まる前のアジアは非常に豊かな状態であったことなどをあげ対比をしたらどうかと考えています。そして、大衆化を説明する前の前提としては、学校が身分で分かれていたこと、識字率が低かったこと、地方意識が主であり国民意識がまだ未形成であったというようなことなどがあげられると思います。また、「グローバル化」を説明する場合には、モンゴル帝国による統

合が大航海時代の前提としてすでに存在していたこと、大航海時代による世界の一体化、スペイン・オランダの覇権というようなことを前提として生徒に示したらどうかと考えています。そして、18世紀後半からの近代化を説明する際、市民革命については焦点化基準aの「自由と規制」をあてはめることになりま。市民革命で法の下での平等が実現するはずなのに、実際には制限選挙が行われました。そこで、男子の有産者しか選挙権を持っていないという現実を指摘し、なぜそうなるのかを考えさせたいと思っています。また、産業革命が進んで欧米では工業化が進行しますが、ちょうどその時代はアジアが植民地されていく時代だという対比ですね。なぜそのようなことがおこるのかを考えさせるという形で、意識的に焦点化基準を活用し、矛盾する現象をあえて生徒に提示してその原因を考えさせるアプローチはどうかと今考えています。

そして、日本史と世界史の比重については、中学の社会科教育で日本史についてはかなり詳しく教えているので、各節の冒頭で中学での既習事項の振り返りを行い、必要に応じて導入的設問を設定してその節の日本史知識と新たに習う世界史との接合を理解しやすくなる工夫をしたらどうかと考えています。

高校における授業の実態を考慮して1・2学期の中間試験を区切りとして前半・後半に分け、試験時間を除いて1学期前半が10時間、後半が11時間、2学期前半が10時間、後半が11時間、3学期が11時間と合計53時間で配分します。なお、試験を5回＝5時間とし、総計58時間で構想してみました。各節を2時間で扱い、初めの1時間は史実の解説を、次の1時間は本文と史料との関係に注目しつつ、設問の解答を考える時間としたらどうかと考えています。高校における授業時間の実態に即して、こういう時間配分を試してみたのですが、高校によって違いがあるかもしれませんが、色々ご意見も伺いたいと思いますが、2単位だと普通70時間しかできないですよ。そのため、本来70時間であるべき建前のところを53時間で授業を考えること自体がどうかと批判を受けそうなのですが、カリキュラムは実態に即して立案しないと結局実施できないので、色々な年間の行事などで歴史の授業が取られる実態に即して現実的な案の方が良いということで考えてみました。それで、授業のまとまりを重視し、第1部「歴史の扉」と第2部「近代化と私たち」を1学期で、第3部「大衆化と私たち」を2学期で、第4部「グローバル化と私たち」と第5部「歴史の中の現在」を3学期で教えるという構成にしてみました。

次期学習指導要領では「主体的で対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）」が重視されているところから、教科書では各節の本文が見開き2頁、史料と設問が1、2頁でおさまる

ように用語を精選するとともに、史料と本文の関係を設問で問う工夫をします。その際、設問は各節2時間の時間内で解答可能なものになるようにします。特に小問という節の終わりに設定する問いはその節の内容で解答が出せるようにしないと、生徒はかえって混乱し、結局教師が説明することになりかねないので、節の本文や史料から読み取れる範囲で考えます。中間は、章の末に設定し、その章全体の内容で導き出せる問いにします。大問は近代化とか大衆化とかグローバル化とか、各部の最後に設定することで、部全体を関連付けて考えることで答える問いにします。この問いを作るということは結構大変な作業になるのではないかと思います。しかも、その問いにふさわしい史料を選ぶこともなかなか大変です。また、本文を書くよりも史料の選択とか問いの設定にかなりのエネルギーを割く必要が出てくるのではないかと思います。1回目の各節を2時間でやるということですので、1回目の史実を中心とした講義を聴いた上で次回までに史料の分析や調べ学習などをすることで、設問への解答を生徒が準備して2回目の授業に臨みます。そして、2回目の授業では調べ学習の結果をグループで出し合い、グループ討論の結果を全体で発表し、教員がコメントする形で設問の解答を導き出す工夫をしたらどうかと考えています。

このように2時間の授業で史実の講義と史資料に基づく討論をセットにしたのは、歴史教育では史実に基づく討論が不可欠であり、生徒の歴史的知識が不足した状況で討論のスキル向上だけを追求する授業方法をとるべきではないと考えたからです。色々聞くとアクティブラーニングの講習会が各地で行われているようですが、そこはプレゼンテーションスキルとか、ディスカッションスキルとか、スキルに傾斜してあまり内容を問わないで技術的な面の研修だけをする傾向が非常に強いと思います。でも歴史の場合は、歴史的な史実に基づいて実証的に議論する習慣がとても大切なので、あくまでも史実に基づく討論をしていくことを促す工夫が必要だと考えました。

最後に第5部として「歴史の中の現在」を設定し、例えば、地球環境問題の歴史的起源を既習の知識を動員して考えてもらい、解決策を考えるとともに自然にも歴史的な変化があるという、自然のリズムと人間社会のリズムにはあきらかに違いがある訳で、むしろ生徒にそれを実感してもらうということが大切なのではないだろうか考えた次第です。

#### IV 「歴史総合」のカリキュラム試案

以上のような観点で作上げたのが、以下のカリキュラム試案です。どんな事例を選ぶかということで、各節になるテーマの選び方が大切な訳ですが、その選び方は多様だと思います。

---

東京でこのことを報告する機会があったのですが、さっそくヨーロッパ中心ではないかという批判を受けました。「近代化」「大衆化」「グローバル化」という大テーマの設定自体が欧米中心になりがちなのです。欧米が先駆けて実施してきた流れですから、それをいかに欧米中心的ではなくできるかが難しいところです。加えて近現代史に集中して前近代の比重が非常に低いので、そうすると近代万歳みたいな授業になりかねません。ですから、近現代の矛盾ですとか問題点というも説明するために前近代の比重をもっと増やすとか、色々な工夫をしなければいけないと思います。そのような面からみても、これからお話しするカリキュラム案というのも一試案にすぎません。他にも色々案があり得ると思います。次期指導要領が12月くらいに公示されてパブリックコメントされますし、確定してから教科書作りに入り、その教科書作りの中でも色々な工夫が行われていくので、一つのたたき台として受け止めていただけると良いと思います。

### 第1部「歴史の扉」

これに4回かけようと思いました。

第1節では「歴史を学ぶ意義」として、特定の事例（例えば、受験戦争の起源と学びの歴史的变化など）を取り上げ、中学までに習った知識の振り返りを行うとともに、日本史中心から世界史の中で日本を考える姿勢への転換や歴史的にもを考える面白さを実感してもらおうと思いました。これは例えば、日本の戦前期の農村等では農繁期になると子どもが学校に来ないというので、先生がそれぞれの家庭を回って教育というのがいかに大切かということを説明しないと生徒たちは学校に来ない。親の農業を手伝うことに追われていたということです。つまり戦前の日本では、教育というのは必ずしも重視されない時代があったのだということは、たぶん今の子どもたちにするとびっくりだと思います。今は絶えず親からも先生からも「勉強しろ、勉強しろ」と言われて、教育に絶対的な価値が付されている訳ですが、そうではない日本もあったことを知ることで、何で、いつからそのような教育が重視されるようになったのかということを生徒自身が考えるきっかけを作ったらどうかと考えました。

第2節では「『歴史総合』の特徴」として、近現代史の時代的転換に注目して、「近代化」「大衆化」「グローバル化」という3大テーマをなぜ設定することになったのか、そして「近代化」は18世紀の後半から、「大衆化」は19世紀の後半から、「グローバル化」は20世紀の後半以降からというように、なぜそのようにすることになったのかを説明する必要があると思います。これについても東京で非常に批判を受けました。「近代化」「大衆化」「グローバル化」というテーマ自体がけしからんという立場の方からすると、その枠に従ってカリキュラムを考え

るのはおかしいのではないかという議論が当然出てきます。しかし、中教審の答申でそういう枠で「歴史総合」を構想すると出ている訳ですから、それを全く無視してカリキュラムを考えることは、私はもはやできない時期に来ていると考えるので、少しでもそれをより良いものにしたという立場でこのカリキュラムを考えていることをご理解いただきたいと思います。

第3節では「歴史の学び方」として、特定の事例を選んで比較（類似や差異の発見）や因果分析の面白さを体験させたいと思っています。

第4節では調べ学習として「家族史の聞き取り調査」を予定しています。これは夏休みの実施を考えていますが、このレポートを書いた上で2学期の冒頭に授業を行おうと思っています。家族史調査として、祖父母や父母の「高校時代の夢」に関して聞き取り調査を行い、それらと自分のそれとを比較することにより、時代の変化を実感できるように促すというアイデアです。

これについては、私自身が大学で夏休みレポートとして戦争体験について聞き取り調査をさせたことがあります。たいいてい祖父や祖父母が戦争体験をしているケースが多くて、お父さん、お母さんはほとんどない、大学生自身はさらにないという状況ですが、日頃核家族ですから祖父や祖父母と交流がないのです。そのため、田舎に行った時に、祖父や祖父母から戦争体験を聞き取り調査してびっくりするわけです。初めて戦争体験を身近に感じるわけです。祖父や祖父母も、日頃孫に話をするチャンスがないので大喜びして、このようなレポートを書かせる先生は大変良い先生だと言っていたと褒めていただいた経験があります。残念ながら戦争体験というテーマではだんだん難しくなってきた、祖父や祖父母もそれを知らない世代になってきているので、例えば「高校時代の夢」「就職」「レジャー」「進学」というような身近なテーマが良いと思います。

今年は女子大で教えていて面白かったのが、祖父母の代は大学に行っていない人が多い。母は短大卒が多かった。本人は4年制大学に来ている。同じ女子教育と言っても違いがはっきり出て、どうして自分が4年制大学にいるのかということ考えさせる良いきっかけになったと思います。そういった意味でテーマの選び方は難しいのですが、このような家族の聞き取り調査は非常に身近に歴史を感じることができる点で良い素材だと思います。しかし、東京の研究会では不評で、大学ではできても高校では難しいのではないかという意見も聞かされていますので、ここも色々アドバイスいただけるとありがたいと思います。

### 第2部「近代化と私たち」

これはタイトルを変えて、「欧米の近代化とアジアの植民地



化」というタイトルの方が矛盾した現象としてはっきりすると思うのですが、答申にあわせてタイトルをそのようにしました。

#### 第1章「結びつく日本と世界」

これは前近代ですが1時間かけます。そして、「古代・中世・近世の社会の基本的な特徴」が身分制と農業中心の社会だったということを示します。振り返りとして、日本史を中心として古代や中・近世の身分制、農業中心の社会の実態、西洋の進出以前ではアジアが非常に豊かであったことを振り返りした上で、ヨーロッパやアジアの身分制社会の特徴を概観し、日本との類似性や相違性を検討します。また、古代ギリシアや古代ローマの奴隷制と並存した民主政の発生の意義と限界についても検討します。これらは比較の方法につながるとは思いますが、これに1時間かけます。前近代のところを2時間でやる余裕はないので1時間にしました。

#### 第2章「市民革命の時代」

この章の冒頭で概観と年表を付して章の中で扱うテーマについての関連を概観するようにしています。

第1節「絶対君主政の成立と主権国家の誕生」、これは「自由と制限」に対応するテーマですが、明治維新による王政復古、身分制の廃止、富国強兵、殖産興業、地租改正などの特徴を振り返ります。そして、フランスにおける絶対王政の成立と国民国家の形成、ウェストファリア条約などによる主権国家の成立とフランスにおける絶対王政の成立を概観した上で、市民革命とその後の革命防衛戦争・ナポレオン戦争によって国民国家が成立し、ナショナリズムが高揚した過程を概観して、明治時代の国民意識との異同を考えます。これは「比較」の方法につながるとは思います。

第2節「市民革命とその限界」で、2時間かけます。イギリスのピューリタン革命や名誉革命の展開を概観した上で、選挙権が男性有産者に限定された原因を考えます。同時に、日本の明治国家と比較して、君主制の違い—天皇主権の体制と立憲君主制—というものを考えていきます。また、制限選挙の導入過程を比較するといったことをやったらどうかと思います。

第3節では、「市民革命と植民地奴隷制の持続」という形で2時間かけます。アメリカの独立革命を事例として、共和政誕生の意味を考えるとともに、南部で奴隷制が持続した原因、奴隷制が南北戦争によって解消された原因を考えたかどうかと考えていますが、これは因果分析に関わるものだと思います。

以上が1学期前半の10時間です。

#### 第3章「産業社会の到来」

ここで概観と年表が与えられます。

第1節は「産業革命の始まりと階層分化」、これは「焦点b」

にあたるもので、「焦点b」は「富裕と貧困」です。振り返りとして、日本における殖産興業、産業革命の過程と都市への労働者の集中過程を振り返ります。そして、イギリスにおける産業革命と特徴と労働者階級の形成を概観して日本との比較をしてみます。

第2節は「資本主義の発展と社会主義の台頭」という形で2時間を使い、フランスやドイツの1848年革命などを事例に、労働者階級の台頭や社会主義運動の発生を概観します。その上で日本との違いや類似性を討論する予定です。

#### 第4章「アジアの植民地化と明治維新」

これも概観と年表を与えた上で、第1節「イギリスの産業革命とインドの植民地化」、これは「自由と制限」「富裕と貧困」に関わるテーマですが、これも2時間でイギリスの産業革命が綿工業を中心に展開した結果、インドの伝統的綿業が破壊され、綿花の原料供給地にされ、植民地化していった過程を考えていきます。これは因果分析に関係します。

第2節は「列強の中国進出と抵抗」という形で、西欧列強の中国進出の結果、アヘン戦争やアロー号事件が発生した過程を概観して中国における洋務運動＝近代化の努力の限界を考えます。

第3節は「日本の明治維新と台湾・朝鮮の植民地化」と題して、ここで3時間を費やします。欧米列強に開国を迫られた日本が、開国後に富国強兵を推進し、日清戦争や日露戦争で台湾や朝鮮を植民地化していった過程を考えます。これは比較の方法ですね。以上、1学期後半11時間を費やして近代化の部分が1学期で終わりになります。

2学期の導入の部として、家族史聞き取り調査というのを夏休みにやってもらい、2学期の冒頭で結果を報告してもらったらどうかということになりました。

#### 第3部「大衆化と私たち（大衆化と世界戦争の時代）」

##### 第1章「前近代社会における民衆意識の特徴」

前近代から近代への教育・情報伝達制度の発達を扱ったらどうかと思います。振り返りとして前近代の日本における言語の地方差、教育制度の未発達、低識字率、情報伝達手段の未発達（瓦版から新聞へ）の状態を概観した上で、明治維新後の義務教育の導入や識字率の高まりの過程を振り返ります。

##### 第2章「民主政の発達とナショナリズムの高揚」

第1節で「ドイツ・イタリアにおける近代国家の成立」、ここではイタリア王国の成立やドイツ統一の過程を概観した上で、日本の明治国家との異同を考えます。これはいわゆる上からの近代化のタイプです。ドイツ・イタリア・日本それが太平洋戦争の前期には日独伊三国同盟という形で結びついていくわけで、イ

---

ギリスやアメリカ・フランスの下からの近代化に対して、上からの近代化というものがどういう矛盾を持っていたのかということをごここで説明したらどうかと考えました。

第2節では「労働運動と男子普通選挙の実現」ということで2時間を費やします。振り返りとして、日本における男子普通選挙権運動の過程と女性参政権実現の時期のずれを振り返り、そのずれの原因を考えます。その上で、イギリスのチャーティスト運動を事例として、労働運動の興隆や男子普通選挙権、社会権の実現過程を概観するとともに、女性参政権の実現が遅れる原因を考えます。

### 第3章 「帝国主義時代とアジアの民族運動」

概観と年表を与えた上で、「19世紀末の重工業化と情報通信手段の発達」を説明します。19世紀末のアメリカを事例にして、重工業化の進行と大企業体制が成立し、ホワイトカラー層が増大する過程を概観した上で、新聞や電報、ラジオなどの情報伝達手段や鉄道、自動車、汽船などの交通革命の進展を考えていきます。

第2節は「中国分割と辛亥革命」で、義和団事件などによる欧米列強の中国分割に反発した中国の民族運動が清朝を打倒する辛亥革命に発展した過程を概観した上で、明治維新と辛亥革命の異同を考えます。

以上が、2学期前半の10時間です。

### 第4章 「第一次世界大戦と総力戦体制の到来」

第1節が「列強間の対抗と第一次世界大戦の勃発」、これに2時間かけます。振り返りとして三国同盟と三国協商の対立からサラエヴォ事件を契機として第一次世界大戦が勃発した過程と日本が参戦した原因を振り返ります。第一次世界大戦が総力戦として戦われた結果、膨大な戦死者が発生した過程と国民動員を実現するために女性参政権が認められる一方、ロシア革命が勃発し、史上初めて社会主義国家が誕生した過程を概観します。

第2節では「第一次世界大戦後の世界体制の特徴と大衆消費社会の登場」に2時間かけますが、振り返りとしてヴェルサイユ・ワシントン体制の成立過程、日本にとっての第一次世界大戦の意味や戦後の大正デモクラシーの意義を振り返ります。そして、第一次世界大戦後のアメリカで車の大量生産などにより大衆消費社会が登場した過程とその意義を確認します。

### 第5章 「大恐慌とファシズム諸国の台頭、第二次世界大戦の勃発」

第1節で「大恐慌とファシズムの台頭」。振り返りとして大恐慌が世界中に深刻な長期不況をもたらした上、日本が満州事変を引き起こし、ドイツでナチス政権が成立した過程を振り返り

ます。その上で、大恐慌の世界では列強を中心にブロック経済化が進み、世界経済の解体が進む中で、ドイツではヴェルサイユ条約に反発するナショナリズムを背景にナチス政権が成立し、軍事力で領土を拡張する動きを示した過程を考えます。

第2節で「第二次世界大戦の勃発」。2時間かけますが、ナチス・ドイツの台頭に対する「宥和政策」（ミュンヘン会談）が破綻し、ドイツがポーランドに侵攻した結果、欧州大戦が勃発した過程を概観します。欧州大戦の緒戦におけるドイツの勝利は日本を刺激し、日独伊三国同盟が成立し、日本が東南アジアへの南進をすすめた結果、日米戦争が勃発し、文字通りの世界大戦に発展した過程を概観します。

第3節では「枢軸諸国の敗戦と第二次世界大戦の終戦」。これは時間の関係で3時間になりますが、振り返りで日米開戦の過程と太平洋戦争の展開過程と、大戦末期における日本の敗戦過程を振り返ります。沖縄戦、原爆投下、ソ連参戦ですね。また、アメリカを中心とする連合国側での戦争遂行過程（技術革新や経済成長、大西洋憲章の提唱など戦後世界構想の立案など）を概観し、アジア太平洋戦線と欧州戦線の相関を考えます。

以上、2学期の後半でした。

### 第4部 「グローバル化と私たち」

3学期ですけれども、「グローバル化とパクス・アメリカーナ」という題をつけても良いのではないかと思います。

#### 第1章 「グローバル化の歴史的前提」

前近代を扱うことで、「モンゴル帝国の成立とアジア域内交易の形成」「大航海時代と西洋の膨張」「帝国主義の成立と世界再分割」を取り上げます。この辺が少し悩ましいところなのですが、「グローバル化」というのは20世紀後半からなので、前近代だけではなく、19世紀末の帝国主義の時代というものが前史として説明しておく必要があるのではないかと考えて入れたわけです。

#### 第2章 「第二次世界大戦後の世界体制の成立と米ソ冷戦」

第1節が「パクス・アメリカーナの形成」で、2時間とります。振り返りとして国際連合が成立したものの、ほどなく米ソ対立が発生し、国連が機能麻痺してゆく過程を振り返ります。それから、ブレトン・ウッズ体制の成立によって米国中心の貿易自由化体制が形成されてゆく過程を概観するとともに、米ソ対立が激化し、戦争が二大陣営に分裂するとともに、核軍拡競争が深刻化する過程を考えます。

第2節「敗戦国の民主化と西欧統合」で2時間かけますが、振り返りとして日本の降伏、占領下の非軍事化・民主化・女性参政権の実現などの過程を振り返ります。そして、ドイツの占

領下での改革（非軍事化・非ナチ化・民主化）を日本と比較しながら学ぶとともに、西欧における独仏和解による西欧統合の始まり（シューマン・プラン）を概観します。

### 第3章 「アジアの独立と緊張緩和」

第1節が「アジアにおける脱植民地化と日本の高度経済成長」を取り上げます。振り返りとして中華人民共和国、朝鮮の分割占領、朝鮮戦争の勃発、アジア・アフリカ会議の発足などアジアの独立過程とともに、日本の高度経済成長の過程を振り返ります。それから、朝鮮戦争やインドシナ戦争（ベトナム戦争）などアジアでは熱戦が勃発した過程を概観するとともに、アジアの熱戦が日本の高度経済成長に与えた影響を考えます。

第2節では「米ソの緊張緩和と世界経済の再編」と題して、振り返りでは南北問題、石油危機、日本企業のアジア進出の過程を振り返るとともに、ベルリンの壁崩壊、マルタ会談などの米ソ緊張緩和の過程を考えます。

### 第4章 「冷戦の終結とグローバル化、地域紛争の激化」

第1節で「アメリカ主導のグローバル化の進展と地域紛争の激化」。振り返りとしてインターネットの登場、EUの発足、国際的テロ活動の激化の仮定を振り返ります。冷戦の終結後に金融や情報通信分野でグローバル化が進展する過程を概観するとともに、ヨーロッパのように地域統合が進展する反面、中東やアフリカのように地域紛争や国際的テロ活動が激化する原因を考えます。

### 第5部 「歴史の中の現在」

1時間ですが、地球環境問題の歴史的原因を考えます。振り返りとして、欧米や日本で始まった工業化が公害などを引き

起こした過程を振り返るとともに、先進国に加えてアジアなどの新興工業諸国の台頭が地球規模の環境問題を引き起こしている原因を考え、解決策を探ります。それにより、環境と人間社会の関係や、環境の変化と人間社会の変化のリズムの違いを実感するというので、第3学期は11時間乃至12時間という形で考えてみました。

### おわりに

以上、ご説明したのは一つの試案にすぎません。これ以外のさまざまな焦点のあて方や節の構成の仕方があると思いますが、私自身、アメリカ現代史が専門なのでどうしても思いつく事例が欧米に偏る傾向があるので、そういうところも批判的に検討していただければと思います。

また、文部科学省の実験校に指定されている神戸大学附属中等教育学校では、引き続き4年間、「歴史基礎」の検討がされてきましたが、これからは「歴史総合」という形で継続することになっています。そこでのカリキュラム案は通史的に構成されているので、現場では受け入れられやすいと思います。

その他、日本橋女学館の案や、高大連携歴史研究会のホームページに入ると対照表にアクセスできます。今まで「歴史総合」に関して色々な案が出ており、それぞれ1年間のカリキュラム案として対比したものも出てきています。それぞれのメリット・デメリットがありますので、それを検討していただき、少しでも教科書を作る過程で参考にしていただければありがたいし、教育実践にも役立てていただけるとありがたいと思います。

## 研 究 協 議

### 「世界史をグローバルにとらえ、歴史的思考力を育てる授業とは」

進行：吉嶺茂樹（北海道有朋高等学校教諭）

**進行：**討論・質問の時間に入ります。午前中から話を聞いてきて、企画側としては大変時宜に合ったお話をいただいたと思います。例えば、油井先生の先ほどのカリキュラム試案を聞いて、教育に絶対的価値をおいていない生徒が多い学校ではどのように取り組むべきなのかを考えていました。例えば、私が取り組んだことがあるのは、生徒の親御さんに「バブル」について質問させるような調べ学習です。とても面白い解答が出てきま

す。結構大変な学校に行けば行くほど面白いレポートが出てきたりするわけで、そのような学校でも色々やりようはあるなと感じました。

まず単純に事項の質問と、また、小松先生のところで少し時間が不足していたので、質問をできなかった部分がありましたらお受けしたいと思います。

今日、日本史と世界史をどういうふうに取り扱って教えるのかという「歴史総合」のケーススタディーになるような事例として小松先生からお話をいただき、それから油井先生には、具体的にそれを現場で落とし込むために53時間でやってみるという事例についての提案をいただいたのですが、先生方の方からご質問・ご意見があればお受けしたいと思います。





**本間**（札幌北陵）：油井先生に質問です。先生の試案の中で、近代化の前と後、グローバル化の前と後、大衆化の前と後、要はこの中項目を章として取り上げていく中で、この中項目で前と後でどのように変化したのか、すなわち近代化は何をもたらしたのかということが非常に重要だと思いました。変化という長期的なスパンで見た際に、その時代の変化もそうですが、今との差異といった目線も非常に重要だと思います。

自分は帝国主義を捉える授業を考案する中で、最初の問いで「なぜインド人は世界の市場で雇用があるのか」というところから、移民や英語教育、識字率に着目させ、最終的なところで、「帝国主義政策によって儲かったのは誰か」を考えるという方法もあると思いました。イギリスの中でも儲かった層もいれば、そうでない層もいる。例えばインドの中でも、支配されて悲惨な状況におかれた人もいれば、逆に移民によってチャンスを得た人もいるという中で、一面的な見方ではない揺り動かさしと言いますか、そういう中で誰が実際に儲かったかに重要な意味があると思い、その変化に着目しました。ただ、そうすると先生が立てた3つのカテゴリーに収まりきれないものがどうしても出てくるので、その辺も含めて教えていただければと思います。

実は先ほど先生にお話いただいていた時に、私の頭に浮かんだのが公共の場でのスカーフの着用禁止です。「自由と制限」について、本当の意味での自由とは何かというところを考察する中で、「歴史的概念の中の自由」と「今現在自由としているもの」を考える授業もありかと思いました。その変化というところについて、お考えを聞かせただけならと思います。

**油井**：どうしても「近代化」「大衆化」「グローバル化」という枠の設定を国民国家単位で考えがちです。特に欧米をモデルにしていかに近代化したかとか、いかに大衆化したかとか、いかにグローバル化したかとか。国民国家を単位にして考え、グローバル化の時代になると国民国家の枠が相対化されていくようなニュアンスがあるにしても、いずれにしても国民国家で歴史を語る傾向が強いので、今仰った移民の問題とか、物の国際

移動みたいなものの要素が軽くなってしまう心配があります。そのような面白いテーマを、いかにこの中に組み込んだら良いかというのも工夫のしどころです。

また、スカーフの問題ですが、特にフランスは共和主義の伝統が強いので、政教分離の建前から宗教的なシンボルを公教育に持ち込んではいけなくと厳しく批判しますが、アメリカの場合は結構、多文化主義というのが出てきていて、それぞれのマイノリティ集団の文化の独自性を尊重する気風があるので、必ずしもスカーフの着用フランスほど神経質ではないと思います。ですから、同じ先進国でもイスラーム圏からの移民に対する不寛容のあらわれ方というのは違いがある。列強はもちろん不寛容な対応ですが、必ずしもスカーフ問題というような形では出てこないと思います。そのような比較も生徒に考えさせると面白いのではないかと思います。

**千田**（札幌東）：例えば世界史を教える上で、私たちもよく近現代史から進めていたりする場合がありますが、やはりどうしても大事な過去に遡ってやらなくてはならないものの中に、例えば宗教があります。特にイスラームのように、それこそ生徒の大半が触れたことのないような、中学校でほとんど学習しない知識。それからやはりキリスト教の問題でも、カトリックとプロテスタントぐらいは知っているけれども、ギリシア正教などは抜けているというような中で、近現代史といっても実は宗教が色々関係してくる場合があります。先生の試案では、宗教についてはどこで、どのタイミングで扱うのかというのが無いと思うのですが、先生ご自身は宗教について、どのようなタイミングでどのように理解させていったら良いとお考えですか。

**油井**：東京の歴史研究会でこの案を検討する中で、イスラーム地域の組み入れ方が非常に難しいという議論はしています。私の案だと第2部の第1章「古代・中世・近世の基本的特徴」で、身分制と農業だけに焦点をあてたのですが、この中でやはり宗教を入れなくてはならないと思います。前近代世界というのが、非常に多元的な地域世界として存在していたというB科目で必ず出てくることを、この歴史総合でも語っておく必要があります。それぞれの地域の独自性を支えているのが宗教であったり文明であったりすることは、こういうところに入れておかなければならないと思います。

しかし、どうしても「歴史総合」の場合は近現代史を中心にテーマで教える形になっているので、テーマ自体が欧米中心になりがちです。その中で一生懸命非欧米世界を入れようとしても、東アジアは入れられる要素があるのですが、イスラーム世界はどのように入れるかがとても難しく感じています。今、大衆

化の時代の、大衆化の一つの特徴として民族運動の高揚という要素を入れ、イスラーム世界における民族運動を入れたらどうかを議論していますが、イスラーム世界を「歴史総合」にどう入れるのかは専門の小松先生のご意見を聞きたいのですが。

**進行：**今日の小松先生のお話は非常に示唆に富むものだと思います。イブラヒムの日本での活動など、ワールドワイドな活動を生徒レベルに落とし込んで教える場合、どういった最低限の知識がイスラームに関して必要かということのを伺えないかと考えました。たぶん20世紀のイスラームと7世紀に成立したイスラームはイコールではないと思うのですが、どういう要素を把握しておさえていないとイブラヒムの話は理解できないのかなど、そのようなことについての示唆があれば、教えていただきたいのですが。

**小松：**かなり大きな話で、しかも時間が限られているのですよね。ふと思うのは、地歴・公民科の他の科目の中でも宗教について教える場というはあるのではないかと思います。世界史に全てを期待されても無理があるので、その辺を考える必要があるのではないのでしょうか。宗教というのはなかなか難しく、教義のさわりを教えれば良いのか、ということにもなりかねません。イスラームではこういうように教えられていて、こういう儀礼をしなければならない、これがイスラームです、という教科書的にはそれで終わるのですが、むしろ我々も、イスラーム教ではないのですが、もっと生の社会で生きている宗教のことを知ってもらった方が良いと思います。

日本にもだんだんモスクができ、イスラーム教徒の人々も増えているので、まずはそういう人たちの話をして、イスラームがとりたてて変わった宗教ではないのだということを知ってもらうことが大切ではないのでしょうか。ただ、イスラームの場合には民族などの別を超えて同胞的な集まりを重視するなど、割と現代社会に根ざせる価値観を重視しているということを知ってもらうことが大切です。しかし、歴史のプロセスの中では、イスラームという宗教が政治的な趣向でキーワードとして使われてくる場合があります。それはISなどもそうなのですが、政治的なものの中でイスラームが強調されることは過去においても現代においてもあり、そういうことを話した方がより良いと思います。

「歴史総合」の最初のところで何を教えるかというのは本当に大切ですが、「歴史の扉」でいえば、生徒たちが今の世界を—日本を含めてですが—いったいどう見ているのかということをお話していただくのが良いのではないのでしょうか。そのような具体的なイメージから始め、それではどうしてこういうようになっているのか、といった問いかけをしていくのが良いのではないかと



思っています。あとは「歴史総合」で最初に生徒たちが見ていた世界から、一年間授業を終えた後でどのように違って見えたのかということをお話してもらいたいとか、そのようなことを感じました。

**進行：**この前東京の会議に出て、驚くべきことに東京ではロハスな生き方の1つとしてイスラーム女子というのが増えているらしいと聞きました。また、これはテレビでも出ていたのですが、ボーイフレンドと結婚することになったらイスラーム教徒で、私はイスラーム教徒になることをまだ両親に話していないのです、という女子がいたという事例があったりして、小松先生のお話のように、今どのように生きるのかということがとても大事だと感じました。これからは先生方、イスラーム女子の時代ですから（笑）そのうち札幌にも出てくるのかどうかはよくわかりませんが、その他ご質問があればお願いします。

**越野（札幌大谷）：**先生のカリキュラムを見てなるほどと思った反面、一つ疑問がありました。先生のお話では1回目の授業で史実を中心とした講義、その後調べ学習をして2時間と設定されています。もちろん調べ学習のために史実の講義が必要だというのは仰る通りで、それがベストだとは思いますが。ただ、カリキュラムを見ていると、調べ学習や、個人で史資料を読ませたりしなくても成り立ってしまう気がしました。何故かという、アクティブラーニングや話し合い、調べ学習はそれをしないと身につかないとか、それをしないと解けない問題というものがないと、進学校ではない場合、指導要領に書かれているからやるということではなくて、それを飛ばしてひたすら知識を教え込む様になってしまうのではないかと思います。入試で必要とされるので必ず調べ学習をしなくてはいけないとか、史資料を分析する力を身につけないといけないとか、生徒にどういう力を具体的につけさせるかがクリアになっており、出口が明確にされていないと実現が難しいように感じましたが、その点先生はどのようにお考えでしょうか。

**油井：**確かに1つの小テーマを節にし、それに時間を割り振っ

て1時間は講義、1時間は討論というように構成していますが、実際その2時間を講義にしてしまうという手もあると思います。しかし、今までの高校の歴史教科書を見ると、ほとんど設問が無いのですよね。中学では少しはあると思いますが、高校になるとすっかりそれが無くなり、教科書の記述と史資料が並んでいるだけです。その史資料と本文の関係をどこかで考えさせるような手がかりがないのです。私はまずは教科書改革をするべきだと考えていて、イメージの中には独仏共通教科書というのがあり、そこでは本文はほとんど見開き1ページの3分の1位が記述で、史料が圧倒的に多いのです。そして4つほどの設問がついていて、その設問を生徒に考えさせる。本文と史料の関係で設問に答えるというスタイルの授業です。ですから、設問が教科書にあるのに先生がそれを無視して講義をひたすらやるということをやってやれないこともないでしょうが、設問をとばして講義だけをやるという従来のスタイルで押し通そうとすれば、何のために設問があるのか、と生徒は疑問に思うのではないのでしょうか。

ですから設問を工夫し、1時間の講義を聞くと生徒が考えられる設問にして、次の時間に設問について討論する形で、考える手がかりを得られるような教科書にするのが1つだと思います。そうすると、先生の方でも考えさせるようなスタイルの授業にできる技術を身に付けなければならないと思います。

そういう意味で色々な研修も必要になってくるでしょうし、「歴史総合」という新しい科目が導入されることで、生徒たちが考える面白さを味わってもらえるようなスタイルに授業の改革も行っていくことになります。そのように教科書改革とセットにして、授業のスタイルを変えていくという努力をする必要があります。

しかも、本当に今回は大学入試の改革とリンクしているので、大学入試で記述式の出題を増やそうと特に国公立大学は言っています。名前をあげるのには差し障りがありますが、某有名私立で細かい暗記式の出題を伝統的に行っていた大学が、個別大学の入試改革の幹事校になって改革していこうとしているわけです。そのくらい個別大学の入試改革も思考力を試すような形になろうとしているので、生徒が普段からそういう訓練を受けていないと答えられないでしょう。大学に進学しようと思う生徒にとっては、日頃から設問に答える訓練することが入試にも役立つ時代になっていくのではないのでしょうか。そうなることを半分期待している面もありますが。

**越野** (札幌大谷)：ありがとうございます。ただ、「思考力」といわれるのですが、センターに代わる新しい共通テストの世界史のモデル問題が提示されて、それが思考力を問う問題といわれているのですが、内容を見ると結局知識量をしっかりと持った人が解ける形になっています。思考力と言われて疑問に思うのが、

どういう問題で思考力を問うのかということがあまりクリアではなくて、共通認識が取れていないので、結局、知識問題ではないの？と思うようなものも出てきてしまっているように感じます。教科書改革を進めるのであれば、もちろん教科書の中に問いを設定することも大事ですが、例えば教科書ソフトの定期テスト例などに思考力をこのような形で問うようにしたら良い、というものが出てくると、問題作成する教員側も、思考力の測り方がわかってくるとと思います。どういう問題で問うか、ということは考えられていますか。

**油井**：私が直接入試改革のグループに入っているわけではないので、全くの私的見解ですが、例えば一日のペーパーテストで思考力を、しかもマークシート方式で問うことには限界があると思います。そのため、色々工夫し、例えば地域をまたいだ問題とか、時代を超えた問題とか、単純な穴埋めではなくて少し考えなくてはならない正誤問題、例えば4つくらいの記事の中から1つ正しいものを選ぶとか、ある程度考えさせる工夫をした出題を今検討していて、この秋にまた公表される予定だと聞いています。しかし、マークシート方式で思考力を問うことには限界があると私個人では思っています。全国の高校の先生と話し合った中で私が面白いと思ったのが、ある高校で総合的な学習の時間で卒業研究をさせている事例です。ある種の卒業論文のようなものを、テーマを自由に選んでそれなりの分量の論文を書かせ、中には歴史を選ぶ生徒が出てくるのですが、それを個別大学の入試判定に入れると良いと思いました。もちろん本人が書いたかどうかの検証が必要ですが、それは面接か何かで聞けばわかることなので、卒業論文のようなものを書き、それを各大学が合否判定の一つの重要な材料に使う、そういうやり方がヨーロッパのパカロレアとか論文試験ですよね。論文を書くのは本当に総合力が試されます。文章力も必要だし、何が面白いと思うのかという着想力も必要だし、構成力も必要だし、分析力も必要です。そういう総合力を見る手段として私は論文試験が良いと思いますが、なかなかすぐそういう方向に転換しようにありません。そのため、とりあえずはマークシート方式で思考力を問う出題ということは今でもしきりにされており、限界はあると思いますが、今までのような単なる暗記力だけで突破できない入試になることは間違いないでしょう。

**進行**：今の油井先生のコメントに関して、やはり色々な議論をしているなということを感じています。これについては先週、外語大の世界史セミナーがあつて、そこで外語大の入試問題を使って、どういうことを分析してきて、何がその結果わかったのか。今日、外語大の先生がお見えになっているので、少し時間があればコメントをいただきたいと油井先生と話していました。



千田（札幌東）：実際にやってみるとなった時に、自分がネットになると思ったのは調べ学習です。夏休みの調べ学習は良いのですが、例えば「歴史総合」は週2回の授業という想定です。ということは毎週1回調べ学習をしなくてはならないと思うのですが、実際、今の高校生は忙しい。また高校生が大学のように専門で歴史をとっているのであれば良いのですが、高校生の学習の中心は国数英です。国数英は毎週4、5時間入っていて、その予習や復習などで膨大な時間が割かれます。

もう一つは、部活動が19時くらいまでやられていて、そうすると家での勉強時間が3時間あるかどうかなので、歴史の勉強をやっている暇はない。ですから日常的に調べ学習をするとすると、土日でも部活動があるので無理ですし、調べ学習というよりも、生徒が歴史の勉強のために多くの時間を割くこと自体がおそらく現実的ではないのかなと私は思います。確かに長期休み中はできると思うのですが、その辺りは話題になっていませんか。

油井：そのような話も出ています。各節で1時間講義をして1時間討論となった場合に、調べ学習というよりは、講義と教科書に書いてあることだけで討論する時間があったら良いと思います。そのため、調べ学習はせいぜい各部の終わり、ですから年に3回位に限定せざるを得ないというのが実情です。教科書の内容や史資料を読み解く点で討論というのもある種のアクティブですが、自分で調べるのはもっとアクティブなことです。そのため、せめて夏休みに調べさせて討論するとか、ないしは各学期の終わりでやるとかくらいはできればと考えています。ある高校の先生にも聞かされたのが、試験の前に調べ学習や討論をやれといっても全然ついてこないで、試験前は避けるなどの工夫をしないと現実には応用できないと思います。むしろ現場の先生方がご自分達のペースでやりやすい形に変えていっていただければ良いのではないかと考えています。

千田（札幌東）：これは質問というより意見というか注文ですが、教科書と史資料という話がありましたが、例えば現行の教科書だと、この史資料はこう読むというように全部書いてあります。私も教科書や副教材の史資料などを使うのですが、この史資料はこういう意味だ、このグラフはこう読むといったように全部答えが書いてあるので、我々が質問しようとしても生徒が「先生ここに書いてありますよ」と言われてしまいます。ですから、もしこれから思考力を問う授業をするのであれば、私は何も解説が書いてない史料やグラフ、そういうものが欲しいのです。教科書も、わざわざキャプションで全部書いてあるのではなく、新しい教科書を作るのであれば、ぜひ何も書いていない、書いてあるのなら教授資料にだけ書いてあるとか、ぜひ編纂作業の時に考慮していただければと思います。よろしく願い致します。

進行：千田先生に水をさすようですが、教科書に関わっている方から言うと、そういうのを書かないと採択しない先生方も一杯いるのです。

また、先生方に情報提供ですが、実は中学校の歴史の時間が5時間増えます。5時間というと教科書のページ数では10頁増えるわけです。その10頁で何をどう増やすのかということが、今度指導要領が公示されたので、それを受けて教科書作りが始まるということになります。歴史の授業が中学校で5時間増える。これは世界史が必修化されないということのバスター取引ではないのですが、そういうようにも聞いています。そうすると、増える5時間分は、当然世界史の中身が10ページ増えるということなので、たぶん私たちは中学校の社会の歴史分野で何をどう扱っているのかということを含めて今まで以上に勉強する必要があるように感じて帰ってきた次第です。

それともう一つ、例えば調べ学習について、札幌聖心学院の先生は授業でスマホを使って調べさせ、その中で完結するようなことをしています。授業見学に行った時、生徒たちは「ありえないんだけどー」とか言いながらやっていました。普通の授業に行ったのですが、そういう形でやっていたのが印象に残っています。

本間（札幌北陵）：油井先生のカリキュラム試案で、小問・中間・大問についてご説明いただきました。その中で、各節の問い、それを組み合わせて章の知識を総合する問い、そして大きな基軸となる問いになっていく。その通りだと思いながら聞かせていただきました。この授業構成の中で、基軸となる問いや中間を生徒が考えたり、答えたりする。その基軸となる問いのところで、先ほど札幌大谷高校の越野先生からありましたが、答えの無いような問いに至るのかな、と。

ただ、このカリキュラム試案だと、それを取る時間がないように感じます。個々の細かい、例えば2時間の中で、節の問いを処理し、それが2、3組み合わせられて章になりますが、その章の問いを考え消化していく。さらにそもそもの大きな問題として大衆化とは何かを考えていくなど問題が大きくなっていく時、そこがこのカリキュラム案だと処理できなくなると思います。そうすると一つ一つの問いが知識ベースになってしまい、アクティブな形式をとらなくても良いのではないかとこの事になっていくと思います。

私は史実から考察することには大賛成ですが、例えば3、4時間を1単位として捉えたり、思考も色々な積み重ね方があったりする中で、歴史に関してはある程度大きなパフォーマンス評価的な課題が合うのかなと考えています。先ほどの帝国主義

の話でも、史実の部分が3、4時間程度。それに対して問い、と先ほど話したようなイメージで授業を作っています。その辺り、授業の構成の仕方というか、時間の使い方、章の作り方、単元の作り方をどのように考えているかご教授いただければと思います。

**油井:** 問いの設定については非常に苦心しており、まだこの中でもはつきりしていないので、変えていく必要があるのですが、いずれ我々も東京の第2次高校歴史教育研究会では、いつかの時点かで副読本的な本にしようとしています。教科書にすると検定があつて難しいので、副読本なら自由に出版でき、このスタイルで出版して先生方が「歴史総合」を教える時に少しでも役に立てばありがたいと思ひ構想しています。

問いの入れ方については、各節2時間の最後の時間で小問を考えさせるつもりです。この小問は本文と史料との関係我问うものなので、特に準備がなくても生徒が答えられるようにします。そして、中間は章末なので、節末でかつ章末になるところが出てきます。例えば3章であれば2節「資本主義の発展と社会主義の台頭」の2時間目は、小問であると同時に中間を課すこととなります。ですから、章末のところでは章末の設問は小問と中間になるというように考えています。その場合、1時間で小問と中間の両方をやるということは果たしてできるのかという問題を討議する必要があります。また、各部の最後に1時間新たに設けて大問を考えさせます。「近代化」なら「近代化」の最後です。そのようなことも必要だと今議論しているのですが、そのように設問を増やしていくとテーマを減らさなくてはいけなくなります。歴史家の常として、このテーマを消すのは忍びないと考えるのです。設問のためにテーマを犠牲にするところの決断があつなくて、ただテーマ史的な教材の場合は思い切つてテーマを削つて討論の時間を増やす工夫をしないといけないので、そこは工夫したいと思っています。

**進行:** 中学校の要領に関わつた先生に直接言われましたが、「吉嶺さんの要領は何だと思ひますか。危機感ですね。つまり2050年頃、40歳前後になる生徒たちに中学校段階で何を教えるのかということを我々は一生懸命考えているのです。人口が大幅に減り、たぶん大学も含めて色々なものがつぶれていく。だいたい8000万人くらいの人口になるそうですが、そういう社会の中で必要とされるリテラシーは何だ、ということから一生懸命議論し、私たちに結論を出して考えた結果がこれです」と。今、本間先生が聞かれたような、次期要領に基づいて、思考力や、なぜ今議論になっているのかということに、要領に関わる方が絶望感を持って要領を作っているということを伝えてお



かなくては思ひていました。

話が戻りますが、この「総合」のことだけではなく、「探究」が3単位になるということも実は大きな問題で、私自身関わる歴史教育研究会でも、今まで「世界史探究」の議論はあまりしていなかったという反省が残っています。4単位が3単位になるというのは試験の受け方から何から変わるわけで、「歴史総合」の上でどういうものを積み上げるのかを考えていく必要があります。

もう一つは、今までは「世界史A」と「世界史B」を同時に座布団式（積み上げ式）で履修することは本来的にスタートの段階では認めていなかったという経緯があることをご存知の方もいると思ひます。実際は「世界史A」をやつた後に「世界史B」を履修するというのが横行していますが、スタート段階では「世界史A」か「世界史B」かという選択の予定でした。それが今回の場合、「歴史総合」をやつた上で「探究」のいずれかを選ぶことになっており、むしろ座布団重ねを積極的にしろという点が違ふと個人的には思ひています。ですから、そういう意味では入試がどのようなものかということですが、それは極めて重要な問題で、現場から声をあげていくことが大事かと思ひています。このことについてどなたかご意見があれば。

**横山 (札幌啓成):** このカリキュラム案を見せていただき、私個人としては64時間あるいは70時間でやるのは結構大変だと思ひました。独仏共通歴史教科書の日本語訳を30ページ位まで自分で練習問題を解いてやってみました。あれはやはり相当学力がないと難しいと思ひます。歴史に対するしっかりとした知識や理解を持っている生徒が答えられる問題であり、短い簡潔な解説を読んですぐ解答を導き出せるというような問いになっていないと思ひます。それにヨーロッパの近代に対する見方も、日本人の研究者が書いてるヨーロッパの、特に西洋史の観点と、独仏教科書を書いている研究者の観点ははずいぶん違ふところが多々あると感じました。はつきり言つてヨーロッパの方はナショナリスティックというか、国民国家という考えがもう自明の

前提としてあり、世界史という視点ではなくて自分の国が世界とどう関わったかという視点で書いてあるのが多いと思いました。従って、もしあのようなレベルで問いを考えた場合は、大変難しい議論になると思います。私自身が答えられない問題も結構一杯ありました。おそらく、独仏の生徒達が相当歴史の基本的な知識や理解を持っていることを前提にして作った教科書ではないかと感じました。

そういうことで考えると、歴史における学力というのは、よく暗記物とか用語が多すぎるのか批判されますが、私自身は基本的には知識と理解が前提だと思います。どれだけ用語に対する知識、量じゃなくて一つ一つの用語を正確に理解し、頭につなげて入れていくかということではないでしょうか。マークシートであるか、論述であるかはどうでも良い問題だと私は思っています。どちらにしても、どれだけ正しい知識と理解を持っているかを聞いている訳で、問われている学力は同じだと思うのです。従って、このプランの中でどのように知識・理解を定着させようとしているのかお考えを聞きたいと思います。

この前の選択肢がたくさんあるような共通テストの世界史のモデル問題は、私もやはりその時代の中で世界に何がおこっていたのかをどれだけ正確に理解して覚えているのかを問う問題だと思いました。マディソンの統計資料が載っていましたが、結局は出来事の正確な知識・理解を聞いている問題だと。評価観点でいうと知識・理解の問題だというように私は捉えたのですが、そういうことも含めて、知識・理解というものが逆にこれから問われるのではないかと。アクティブラーニングとかをやる上での本当に前提となる知識・理解についてお訊きしたいということです。

**油井**：歴史の教育は何と言っても史実に基づいて議論するというのが大前提なので、知識と理解というものが無いと問いをたてても答えられないでしょう。ですから私が言った設問を小・中・大と分ける時に、小問は別な知識がなくても教科書に書いてあることと示されている史資料を読むことで答えられる問いにする。そのような小問の作り方が難しいと思います。教師とか教科書執筆者はある程度知識を持っているので、いくら自分達の知識で答えられそうな小問を立てても、本当に生徒が答えられるとは限らないのです。そういう意味で、白紙の状態でも教科書と史資料を見ただけで生徒が答えられる小問とはどういうものかをよく考えなくてはならない難しさがあります。

小問はそういう意味で、知識と理解度を試すために良いのですが、中間になると章を超えて考えなくてはならない問いなので、それまでに習ったことや他の教科で習ったこと等も総動員して考えなくてはならない。中間は場合によっては章の中だけでは

済まず、他の章との関係、前に出た章との関係を問うこともあり得ます。そうすると知識の活用能力が問われます。ただ覚えていだけではなく、ある時代のここで習った事と、別な時代のここで習ったことが関係するのかもしれないかとか。そのような活用能力を問うのが今度のアクティブラーニングの新しさだと思います。

ですから知識を活用して答えのない問いに答えを出そうとする努力、答えというのは予め与えないのです。考えるプロセス、これを生徒が体験することを重視する面があると思います。そういうトレーニングをしていると、これから社会に出て色々な難しい問いにぶつかった時にそれを考える手続きがわかりやすくなります。そういうトレーニングを狙っていると思うのです。だから中間や大問を考える時に、色々な知識や分析方法を総動員して生徒が考えていくところに新しさが出てくるはずで。そういう新しさを出せる中間・大問を考えるのがなかなか難しいのです。

ですから、高校にも様々なレベルの高校があることを承知しておりますので、様々なレベルの生徒たちが考える楽しさというものも味わってもらえるような設問をどう作れるかということは相当工夫しないと解決しない問題です。まさにそのようなところは現場の先生たちの意見を伺いながら改良していかなければならないところだと思っています。

**横山**（札幌啓成）：そうなった場合、いわゆる新テストも相当設問数が少なくならざるを得ないのではないかと思います。例えば大学でも単位修得にあたっては、何々について説明しなさいとかいわゆる知識・理解を聞くわけです。そう考えると、これまでのように三十数問なんて出題できないですね。10問だって厳しいと思うのですが、どのように組み合わせると何問くらいになるのでしょうか。

**油井**：実際にはセンター入試の改革をやっている人じゃないと答えられないので、少し東京外語大の経験を紹介してみたいかがでしょうか。

**進行**：先週、外語大で世界史セミナーという高校の先生向けのセミナーをやりました。外語大の過去の入試問題、どう考えてどう作ってきたかというご報告を、今日の会へのコメントも含めてお話いただきたいと思います。

**鈴木**（東京外語大）：ここに『歴史的思考を問う材料としての東京外語大学世界史入試問題』という本があります。東京外語大は2006年に、それまでの英語1科目を変え、前期日程で世界史を復活させました。復活というのは、1989年まで世界史をやっていたからです。1989年までの世界史問題は完全論述制で、史料を出して、一問だけ、何々を答えなさいという、800字くらいの文章を書かせていました。語句とか用語も一切なくそ





れだけです。

2006年以降、2014年まで世界史が必修で、2015年から2017年までの3年間は日本史と世界史の選択問題になっており、この12年間の世界史問題をまとめてみようということになりました。構成はご存知の方も多いと思いますが、70点分は一問一答の歴史用語です。30点が論述ですが、10点分は100～120字の短いものです。20点分が400字の論述という形で、この場合はキーワードを与えて書いてもらいます。史料問題なので入試の演習問題として授業されることも多いと思いますが、やはり歴史的思考の教材としてこのような入試問題が使えるのではないかと思います。つまり思考力を問う問題として作題しており、そういう使い方ができるはずなので、資料を提供する形で出版しました。考察については金井さんの書かれたものがあります。まだ在庫がありますので、もしご希望があれば私の方にご連絡ください。

知識と理解のことですが、キーワードを与えて400字書いてもらうという形式は皆さんの方が詳しいかもしれません。キーワードは4～6つくらい。時系列的な理解ができていない、それともキーワードそのものが何を指しているのか理解できていないと、とんでもない前後関係が無茶苦茶な、ただ用語は使っているけれど論になっていないとか、全く関係ないところでキーワードが使われるといった答案になってしまう。逆に言えば、時系列的な順序、それからそのキーワードはどのような歴史的事実を意味しているのか、これが理解できて初めて論述として成り立つのです。そういう意味では、この論述というものは、知識と理解を同時に問うことができる。思考力はなかなか抽象的な概念で難しいのですが、少なくとも歴史的用語の知識という概念は十分試すことができるということも10年程度やってきて、わかってきたと思います。

**金井** (東京外語大): 入試問題の作成は私もここ数年外れていますが、幸いなことに外語大は、世界史関係では地域史、諸地域専門の先生方が集まるので、問題作成の時は、それぞれ史料を持ち寄って話している時、まず作題の方が盛り上がっ

てしまい、いつもこの史料面白いねとか、何か疑問点を作れないかとか、そういうところから話が進んでいきます。しかし、そのままだと問題が作れないのですが、そのような話の中から、先生方が、また専門家の人たちがある種面白いと思えるような題材が見つかり、それをどのように高校生に落とし込むかを議論して、手前味噌ですが好評をいただいている問題が作れるのかと思います。そういう意味では、入試を作る方も役務として貴重な時間だけれども仕方ないから作ってやる、というような感じではないことが一定の個性になり、生徒・学生に対してどう刺激するかということにつながるのではないかと私自身も感じています。

外語大は日本史を入れたことで世界史がずいぶん欠け落ちたという自覚のある生徒がいますので、「大学生のための世界史」という科目を作り、本来は補習のつもりだったのですが、実はそこに入学した学生の半数以上、トータルすると7百名の中の5百名程度で、毎年入学者のうちの6、7割の学生が履修する授業になっています。ですから補習という感じではなく、「世界史を高校でやってそれなりに好きなだけけれど、暗記ばかりで面白くなかった」という生徒が殺到してきました。大学の世界史だとストーリーなのでワクワクするような話を聞けるのではないかと。

そして実際に都立高校で大変創造的な世界史をやっていた今泉先生に非常勤で授業を持っていただき、非常に苦勞して大人数の授業にも対応していただきました。教材を上手に使い、学生たちに何かを学んだと実感できるような授業にするため、学力差がかなりある学生に対して非常に熱意を持って取り組んでいただきました。4百数十人が登録する授業は他にもありますが、この授業ではそのうちだいたい420～430人位受験して単位をとるそうです。普通は4百数十人の授業だと100人位辞めてしまい、200人辞めてもおかしくない状態です。席も密集しており、環境も良くないです。その中で、4百数十人も学生が履修しているというのが世界史の持っている可能性を示しているのではないかと思います。

高校の先生方はクリエイティブに色々な史資料を見つけ、調べ学習を工夫して生徒たちが食いつくように努力しています。しかし、それは表面的に面白いだけではなく、歴史の本質をつく問題を工夫しているところに私も感心しております。そういう授業で歴史の本質に教師自身が迫るといって、そういう営みを垣間見せていくと、学生は飛びつきワクワクして聞いてくれます。そういう意味でも教える側がワクワクしていることが非常に大事な科目として世界史があつて、夏休みでもこのようにお集まりになる世界史大好きという方々が先生になっている。それがうまくつながると、生徒に対して刺激というのが与えられるのだと思っ



おります。

外語大で世界史が始まってからの経験からすると、私自身も世界が広がって色々な分野の人と交流することができました。小松先生とは世界史の問題を作ったことはありませんが、お話しを聞いてずいぶん視野が広がりました。学生たちが持つ好奇心を学術のレベルにつなげるというのは難しいのですが、それをつないだ場合、すごい反応が起こるのではないかと十数年の経験の中から感じているところです。

**進行：**今お話に出てきた今泉先生という方は、山川の世界史用語集を作っている方です。山川の世界史用語集を作っている方がどういう授業をやっているか興味がありますよね。私も個人的にお話をさせていただき、大阪大学が出している『市民のための世界史』を大胆に使いこなし、先ほどのアンガス・マディソンの資料も使いながらお話をされているということなどを聞きました。

**進行：**今、大阪大学の話も出ましたので、高大連携研の事務局局長をされている大阪大学の中村さんが会場にお見えなのでコメントをいただければと思います。

**中村（大阪大学）：**この会には3年ほど前に一度出席させていただきました。私が専門にしているのは日本の中世史で、「歴史総合」では前近代とされてずいぶん減らされてしまうところです。「歴史総合」を考える時、やはり中学校の歴史教育との接続の問題があると思います。先ほど吉嶺先生からもコメントがありましたが、中学校の歴史科目自体は高校での世界史必修を前提に組まれたものなので、これが「歴史総合」の時にはどう変わるのかということは外せないでしょう。先ほど油井先生への質問の中にも、宗教の問題をどう考えるのかというものがありましたが、この辺りの問題も含め「歴史総合」は2単位しかないなので、そこに全て押し付ける必要もないわけで、中学校の側でどれだけサポートできるかを考える必要があると思います。そのためは、中学校の歴史の教科書自体は日本史の先生が多く携わっていますから、今世界史の先生が多く集まっている中で言っても仕方ないですが、日本史の側が相当意識を変える必要がある

だろうと考えております。

それにあたって大切なのは日本史と世界史の連携なのですが、世界史はずいぶん進んでいて、ある意味ではこれが最後の逆転のチャンスのように考えていると思いますが、日本史の側では既得権益の侵害だと思っているでしょう。やはり受け止め方もずいぶん違い、私も日本史業界でこのように言うともた、変に感化されていると言われるのですが、日本史側がどう変わるかということを引きつと詰める必要があると考えています。

もう一つは思考力の問題で、抽象的なものですから具体的な指標が与えにくいという問題があります。これに関してはうちの高大研で運営委員長をやっている桃木先生を中心に「歴史の公式100選」という形で問題提起をしています。論文を書く時に無意識的に意識しているものをしっかり文章化し、可視化するのだというコンセプトで作られているものなので、いった思考力を問うためにどんな問題を出したら良いのかということ公式という形で可視化したもので、ではこの公式の何番を一体どう問うたら良いのかというように考えるともう少し具体的な作問ができるし、あるいは授業の時に生かせるのではないかと個人的には考えています。おそらく彼もそれを考えていると思います。「100選」と言ってもまだWEB上に公開されている訳ではありませんので、興味のある方はぜひとも入会していただければと思います。年会費3,000円と少し高いですが、情報をどんどんアップしていますし、編集も吉嶺先生をはじめ頑張っていますので、ぜひご協力いただければ幸いです。

**進行：**この第2部会では今、歴史教育に使えるWEBサイト作りを進めています。要約と、こういうものが出ているなどという情報を、国の機関も含めて階層的にまとめようとしています。さらに、全国の先生方から色々な授業案・指導案・プリントをPDFファイルで集め、時代ごとに分けて全部リンクを貼るなどして使えるサイトにしようという作業を進めているところです。

また、日本史の話が出ましたが、この会場に道日本史教育研究会の春木先生がお見えになっているので、日本史を教えている立場からお話をいただきたいと思います。

**春木（札幌旭丘）：**まず、こういう問題が一番大きいと思うのが、世界史研究会と日本史研究会が一緒ではないことがそもそも不思議ですし、日本史と世界史だけではなく倫理・政経など他の科目と、我々自身の職場環境で本当に意思疎通ができていくのかということです。一緒に問題を考えることができているのかどうか。特に大規模校では大きな科目の壁や教科の壁ができていないかどうか。そういうことを再検討するべき時期がきてしまったのだと思います。黒船が来ているので一致団結しなくてはならないことを今感じました。



あと、高校には入試があるのである程度レベルに分けられ、均質になります。しかし、中学校では確かに教科書があり、指導要領もありますが、地域・学校ごとに大きな差があるようで、それがどの程度なのかを知らないと、中学校で日本史をやっているから復習はこれ位で、とはいかないと思いましたし、そのあたりの我々の研鑽が必要だと思いました。

**本間**（札幌北陵）：「歴史総合」について考える中で、自分個人的には良い試みだと思いますし、絶対定着を成功させたいとも思っています。ただ、世界史Aや日本史Aにあったような“骨抜き”というのがあってはいけないとも考えています。先ほど吉嶺先生から「探究」について議論が少ないという話がありましたが、私が一番懸念するのが大学入学希望者学力評価テストの科目設定です。要は、「歴史総合」で身に付けたものがなくても解ける問題であったりとか、今の「世界史A」「世界史B」のように「歴史総合」と「探究」が別物だったりすると、「歴史総合」の名目で「探究」のような授業をする学校が必ず出てくると思います。

そういう中で半ばお願いなのですが、その科目設定のあり方について、ぜひ油井先生に色々なところに働きかけていただきたいと願っています。個人的には座布団型というか、「探究」科目で歴史・地理・日本史と分野の選択をした中で共通問題的なものがあり、かつ、それが「地理総合」「歴史総合」のそれぞれのものがあって、例えば80点なら80点分が「探究」的な部分という形でなければ、「地理総合」も「歴史総合」も本来の目的通りにはなされないとします。本校は全国的に真ん中くらいで、今まで知識の詰め込みで何とかクリアしてきた学校なので、必ずそのような意見が他の地歴・公民科教員から出てきます。個人的には「歴史総合」を本当にこの理念通りの授業にしたいので、その科目設定のあり方において、「歴史総合」の部分といっても分けるのは難しいかもしれませんが、「歴史総合」を「歴史総合」として学習しなければできない部分と、「探究」の部分とが、両方しっかりやっていないとできないような科

目設定になるように、ぜひとも働きかけていただきたいと思いません。

**千田**（札幌東）：「世界史A」が駄目になったのには色々理由があるとは思いますが、一つには旧七帝大—この辺だと北大—が受験科目に「世界史A」を廃止してしまったことではないでしょうか。ちなみにこうした大学では、公民科でも倫理と政経を合わせていないと駄目だということになり、「倫理・政経」が必須です。文系ならまだしも理系でも廃止してしまい、使えないのでは教える意味がないのではないかとということになって「世界史A」がダメになった流れがあります。また、形の上では「世界史A」を設置し、裏技で色々やって履修飛ばしという問題になってしまった。理系なのにB科目が必要だという現在の入試では、理系の受験生は理科の履修事項が増える中で相当大変になっています。以前の理科がセンター試験でIIを置かなかつたように、「探究」は共通テストに置かないとか、文系の二次試験の時にだけ使うという手もあると思います。そういう形でもしないと「歴史総合」の時間に「探究」をやってしまうことになりかねないと思います。今回はだいぶコミットされていますが、大学の先生方が科目の意味を理解せずに受験科目を設定したのではないかとされる節がありましたので、これからはそうならないように働きかけていただければと思います。

それから、先ほど外語大の話があったのですが、私も昨年鈴木先生からオープンキャンパスの時に配布する資料をいただき、大変感動しました。どういうコンセプトで問題を作り、どういう解答を求めているのかを示すという試みは、他の大学にも広がって欲しいと思います。

昨年、今年と北大の入試問題のモニターに当たり、問題の評価を求められたのですが、結局それは基本的には外部に公表されず、また依頼の時に渡されるのは解答だけです（少なくとも文学部はそうです）。この問題がどのようなコンセプトかということなどは何もないので、こちらで評価のしようがないし、ここが書けていれば大丈夫だとか、ここが書けていないと駄目とかというものもなく、さらによくよく解答を見てみたら解答例が設問で問うたことを満たしていないだろうというものもあり、やはり外部の評価にさらされないというのは結局そうなると思います。他の人が見ているとなれば問題作成の方も緊張して作るでしょうし、そうならないというのが問題で、大学側も積極的に公開して欲しいと思います。そのようなことから、こういう生徒が欲しいのだということを公開している外語大は本当にすばらしですし、これからもぜひ全国の大学に広めていただきたいと思えます。



**進行：**歴史の問題が国語のようになったら良いと思いませんか。つまり、何を授業でやったのかということと入試問題に何が出るかは違っても全く何も言われないということです。これが載っているとか、これが載っていないとか、そもそも国語の入試問題ではあり得ません。違うのではないかと思うのですが、冬休みの講習で取り上げた問題が入試で出たらし中とか言ってね。的中なんて当たり前です歴史の業界では。そのため、歴史も国語のようにならないかとかねがね考えており、そうすると「歴史総合」はもっと自由になると思います。先ほどの本間先生、千田先生の意見にもつながることなのですが、そうしないと「歴史総合」が、「歴史総合」の日本史分野1単位+「歴史総合」の世界史分野1単位に分けられ、それぞれ日本史の教員と世界史の教員が分担し、探究3単位にその1単位を加えて4単位になり、これまでの講義のノートと同じでOKという実践が圧倒的になる可能性が大きいと思います。そのため、北海道でこういうヒアリングができたということはぜひ伝えていただきたいし、色々なところで議論する中で、そういう話が出て欲しいと思っています。

**油井：**共通テストに「歴史総合」をどう位置づけるのかということは確かに重要なポイントですが、もう一つ、「新テスト」という、高校の到達度を測るテストの導入が検討されています。「歴史総合」は1年生でやることが多いと思うので、「新テスト」の科目になる可能性もあります。ですから共通テストや個別大学テストとの位置づけだけではなく、もう少し可能性を考えて検討した方が良いのではないのでしょうか。

それから、個別大学の入試にもっと外部評価が必要だということは、最近はかなり言われておまして、間違った出題するとマスコミにたたかれます。大学は非常にこれを恐れていて、だいたい入試が終わった直後に、例えば予備校等色々な所に問い合わせをしているようです。間違った場合には採点のやり直しなどもやっていますから、今はかなり外部の評価を気にしていると思います。ただ、今はそれが単なる出題ミスみたいなレベルで済まされてしまっているの、さらに生徒の思考力を問う良問かどうかとか、このような暗記力だけを問う古典的な問題ではだめだとか、質的な評価の導入が必要になってくるでしょう。

私の方から質問ですが、高大連携の研究会で用語の精選をやっていて非常に苦労しています。この苦労の理由が、高校の先生方が中心に精選している中で、皆自分の経験に基づき、これは要るとかこれは要らないとか言うのですが、やはり評価が多様化していて統一基準が立てられないことです。

一つお伺いしたいのは、一つの授業で思考力育成の要素も

入れた場合に1時間で15程度の用語が限度ではないかという意見があり、それに全体の時間をかけると2千語くらいが妥当ではないかということで、2千語案というのがすでにできています。果たしてその“15”が妥当性を持つのかということが重要なポイントです。現状では40程度です。40の用語が並んでいると用語説明だけで1時間終わるため、とても無理だろうという意見も聞いています。しかし、一方で15でも多いという意見があります。そういうように機械的に1時間で可能な用語数といったアプローチが良いのかというのが一つの問題です。

もう1つの問題は、例えば10の教科書があった場合、せめて8以上の教科書でとり上げている言葉というのはある程度普遍性があると思われ、用語集に載せる用語を、8以上を基準に選ぶというアプローチです。ところがこのアプローチの場合、用語集をそもそもけしからんと思っている人が世の中にはいます。用語集に準拠して精選したということ自体が反発を生む心配がある。では他に精選する方法はあるのだろうかとか非常に苦慮しているの、良い知恵があれば教えていただきたいという切実なお願いです。

**進行：**そのような作業を私の友人・知人もやっているのですが、膨大なエネルギーが必要なようです。Excelに先生方が全部の用語、7千数百語を打ち込むところから考えてみていただきたいと思います。それをどういう基準で選ぶかということも難しい問題で、今の油井先生のお話は本当にその通りだと思いました。私個人としては、これまでの進学校と大変な学校の経験の両方を重ね合わせてみて、15という数字は50分授業でいくとほしい3分で1つ。それにいくつか余談をしてもそれほど無理な数ではないのではないかと。大変な学校での経験を踏まえてお話しました。先生方からも2、3ご意見をいただけるとありがたいのですが。

**千田（札幌東）：**用語を出さないということはそのこと自体を教えないこととイコールなのでしょう。それとも、教えるはするが用語を出さないということなのでしょう。例えばこの前、私が経験したのは、19世紀の後半にラテンアメリカでインディオの文化復権の主張からおこった文化運動について何ということという問題が、どこかの私大の問題に出ていました。自分は、そうした動きがあったことは知っていたものの、その用語（インディヘニスモ）を知らなくて、調べてみると東京書籍の教科書に出ていたということがありました。用語を絞るということは、この例でいうと、ラテンアメリカでそういう動きがあったと教えた上で用語（ここでいうと「インディヘニスモ」）を教えないのか、そもそも内容自体教えないと考えるのか、どちらなのでしょう。

**油井：**用語の精選という場合、教科書用語を精選するというア

プローチと大学入試の出題用語を精選するという2通りあります。それで、教科書というのは本来色々なあり方があり、例えばアメリカの教科書は電話帳のように厚いものです。それは大学入試にそのまま直結していないので、一つ一つを暗記させるようなことはさせていないわけです。日本も大学入試と切り離されて歴史教科書ができるならば、どんどん用語を増やし、それは先生が選択すれば良いと思います。

これは私の個人的意見ですが、精選をまずしなければいけないのは大学入試の出題用語の精選であり、これをすれば教育現場も無理する必要がなく、それ以外の用語は余裕があれば教えれば良いことです。そのため、大学入試の出題用語の精選という形で提案していった方が良いのではないかと個人的には思っていますが、それはこれから議論していくところです。

**千田**（札幌東）：ということは内容としては学ぶけれども、用語自体は必要ないということですか。

**進行**：入試に出す用語としては切るということですね。ただし、それは大学の出題権を制限することになるので大変難しい議論があるのですが。

**油井**：高校を卒業した段階で基本的に身に付けていなければならない歴史的な素養を、ある数の用語で表現する。そういう発想ですね。だから大学側としては最低このくらいの歴史的知識を持って入学して欲しいということを問う時に、ある程度用語を精選しても良いのではないかといいことですね。

**進行**：時間になりましたが、小松先生のこれまでの仕事や午前中のお話を受け、午後このような「歴史総合」の話をしてきました。そこで小松先生から最後にコメントをいただきたいと思えます。

**小松**：私も今歴史の教科書の執筆者となっていますし、それから先週の外語大とのシンポジウムにも参加しました。今週の月曜日、同僚が島根県の出雲高校で18歳選挙権に関する話をした際、そのコーディネーターとして同行してきました。その時に生徒の一人が面白いことを言っていました。最近やたらにアクティブラーニングというけれども、別に講義形式でもアクティブラーニングができるのではないかといいことですね。後で「君が言ったことは正しい」と言ってきたのですが、やれば良いということではないことを彼ら自身もわかっているんですね。私はこれからも色々な教科書を書くことを求められているわけですが、「歴史総合」と「探究」とを一方では分けなくてはならないし、一方では接続しなければならないということが結構大変だと思っておりまして、今日は色々なお話を伺って大変参考になりました。

やはり「歴史総合」の場合には、基本精神としては理系/文系、大学へ行く/行かないを問わず、そのまま社会に出て行く人が想定されるので、ここまでは歴史の知識として持っていて欲しいということをお求めがあると思っています。その場合、同じ歴史を扱うので、自ずから接続できると思うのですが、語り方は変えたほうが良いのかなと考えております。

それから先ほどイスラームの話が出てきた時に、現在の日本でもイスラームに関してはステレオタイプの理解がまだ根深く残っているように感じます。実は午前中に話したイブラヒムも、「イスラームというと皆、4人妻が持てるとかそういうことしか聞いてこない、もっとイスラームとは何かを教えたいのだ」というような発言をしているのですが、例えばラマダーンという断食の話も日本では間違えて受け止められていて、1ヶ月も断食するのは大変だろうというのですが、実は本人たちは「断食は楽しい」とよく言っております。昼間は食べないけれども、夜はご馳走を毎日食べ、色々な人と一緒に過ごすことができるので楽しいとか、かえってラマダーンで体重が増えてしまうとか。また、女性のベールについても、これも女性を隔離する因習とかいう議論があります。しかし当の女性にすると、あれを着ていると中は何を着ても良いとか、顔を覆った場合に化粧もしなくて良いというように大変楽な衣装であって、決して女性を強制的に虐げる為のものではないのです。そういう見方を色々なところで提供していくような教科書ができたら良いのかなと思います。

必ず歴史上の事件というのは複数の当事者がいる訳で、それをうまく説明できる、あるいはそれを示すような史料を提供していかなければいけないのかなと考えています。史料というものは一見客観的に見えるのですが、実は史料はとても政治性があり、何を選ぶかによって変わってしまいます。ですからその辺の選択の仕方も注意しなければいけませんし、大学の研究者も資料集の作成などにもっとコミットしていく必要があると思います。午前中にお話した画像史料というのは、ある種生徒たちをその場でタイムカプセルに乗せ、ある時代に導く大変有効な素材となっていて、それで考えてもらうことはとても良いと思うのです。そのためにはある程度、色々なタイプの画像史料を公表し、共有して使っていただけるシステムをどこかで作ることができれば一番良いと思いました。

**進行**：まだ二十代、三十代前半の頃、北海道の世界史教育を全国レベルにしたいと話していた先生方がこの場に揃い、こういう形で話ができただけを個人的には大変うれしく思っています。2年後は50周年なので北海道からも少しは発信していきたいと考えており、そのステップとして大変良い会になったと思います。先生方大変有難うございました。

# 第 49 回研究大会のご案内

日 時 平成 30 年 8 月 3 日 (金) 9:00 ~

会 場 札幌市教育文化会館 研修室 403  
(札幌市中央区北 1 条西 13 丁目)

講 師 未定

研究発表 未定 (募集中)

過去の研究大会講演題目	
回 (年)	講演題目・講師
43(H24)	・「新しい世界史へ」 東京大学東洋文化研究所教授・東京大学副学長 羽 田 正 氏
44(H25)	・「『東アジア世界論』のみなおしのために—前近代を中心に—」 神戸女子大学教授 山 内 晋 次 氏 ・「南蛮貿易とアジア人奴隷—大航海時代のユダヤ人ディアスポラとの相関を中心に—」 東京大学史料編纂所助教 岡 美穂子 氏
45(H26)	・「アジアに利用されたイギリス帝国—グローバル=ヒストリーの視点から」 大阪大学教授 秋 田 茂 氏 ・「帝国と社会主義の遺産からウクライナ情勢を考える」 北海道大学准教授 長 縄 宣 博 氏 ・「日本学術会議提言『歴史基礎』科目と歴史的思考力育成型の歴史教育とは—韓国の教科書事例から学ぶ」 東京学芸大学名誉教授 君 島 和 彦 氏
46(H27)	・「『歴史と記憶』をめぐる諸問題—資質・能力の育成と歴史学習—」 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官 村 瀬 正 幸 氏 ・「『他者』、そして『自己』の理解のために—日本史を世界において考える」 跡見学園女子大学文学部特任教授 三 谷 博 氏
47(H28)	・「アジアの開発とグローバル・エコノミーの展開：GIS を用いて」 東京大学大学院人文社会系研究科教授 水 島 司 氏 ・「これからの世界史教育を展望する」 長野県長野高等学校教頭 小 川 幸 司 氏

## ◆編集後記◆

会報第 24 号をお届け致します。日ごろより会員の皆様の御協力・御支援に改めて御礼を申し上げます。また、記録を御担当頂きました札幌英藍高等学校の菊池真哉先生、札幌西陵高等学校の北嶋靖之先生には、御多忙にもかかわらず原稿を作成して頂き、誠にありがとうございました。

今号は、講演の記録を「です・ます」調にしてみました。ページ数が多くなるのは否めませんが、研究会に参加しているような臨場感が再現出来たのではないかと思います。今後とも紙面の充実に力を入れて参りますので、御協力よろしく申し上げます。(札幌東高等学校・千田周二)